

ショウガ辛味成分が骨格筋細胞の代謝および運動機能に与える影響

Effects of [6]-shogaol and [6]-gingerol on function and metabolism of C2C12 myotubes.

栗山 恵弥

Megumi Kuriyama

大妻女子大学大学院 人間文化研究科 人間生活科学専攻 健康・栄養科学専修

キーワード：骨格筋細胞，ショウガオール，ジンゲロール，電気刺激

Key words : Skeletal muscle, [6]-shogaol, [6]-gingerol, Electrical stimulation

1. 目的

ショウガの辛味成分にはジンゲロール，ショウガオール，ジンゲロンがある。その中でも主要辛味成分であるジンゲロールは熱に不安定な化合物で，加熱により脱水反応を起こしショウガオールに変わることがわかっている。

筋肉量の減少は，高齢者の健康状態を「負のスパイラル」に導くことが指摘されているが，骨格筋細胞内の筋原繊維量の変化には運動習慣だけではなく栄養状態が大きな影響を与えられられる。ショウガ抽出液が，骨格筋細胞におけるグルコースの取込みを増加させ，代謝およびエネルギー消費を促進させる効果が報告されているが，その結果，骨格筋の筋原繊維量や運動機能にどのような影響を与えるかについて，細胞・分子レベルでの研究はない。

本研究ではショウガ辛味成分であるジンゲロールとショウガオールの摂取が，骨格筋の糖取り込みとその後の代謝，骨格筋の筋収縮に関わる筋原繊維構築，筋収縮を司る ATP 産生能にどのような影響を与えるかを調べることを目的とした。骨格筋細胞に疑似的運動を与えるため電気刺激装置を使用し，筋タンパク質や代謝関連タンパク質の mRNA 発現量，筋原繊維の構造，ミトコンドリア量および ATP 量にショウガ辛味成分が与える影響を調べた。

2. 方法

細胞培養：マウス筋芽細胞株 C2C12 細胞を用いた。この細胞は，Confluent まで増殖させた後ウマ血清を添加した培地で培養することで，急速に筋管細胞へと分化する。分化培地に交換後 7 日目の細胞にショウガ辛味成分処理 and/or 電気刺激処

理を 24 時間行った後，以下の実験を行った。

ショウガ辛味成分処理：分化 7 日目に 0~50 nM の 6-ジンゲロールまたは 6-ショウガオールを含む分化誘導培地に交換し，24 時間処理を行った。

電気刺激処理：分化 7 日目に電気刺激装置 C-Dish を用いて，16.7V/25 mm の電気刺激を 2 ms 間隔で連続的に 24 時間与えた。

mRNA 発現量の定量：細胞より Total RNA を抽出し，cDNA に逆転写後，リアルタイム PCR 法を用いて mRNA 発現量を定量した。

筋原繊維構造の可視化：免疫蛍光染色法を用いて速筋型ミオシン重鎖を観察した。

ミトコンドリアの蛍光観察：ミトコンドリア染色色素 MitoTracker Green で染色し，ミトコンドリア発現量を蛍光強度を用いて解析した。

細胞内 ATP 量の定量：ATP 依存的な luciferase の反応を利用し，細胞内 ATP 量を Luciferase の発光強度として定量した。

3. 結果と考察

1. 骨格筋タンパク質，代謝関連タンパク質の mRNA 発現量に与える影響

ショウガオールは電気刺激(-)環境の C2C12 細胞に対し，筋分化を促進して筋タンパク質の発現を増加させ，また糖の取り込みおよび糖代謝に関わるタンパク質の mRNA 発現量も増加させた。一方，電気刺激(+)環境では筋原線維への分化が若干抑えられ，糖の取り込みに関わるタンパク質の発現も抑制される傾向がみられた。ショウガオールは，主に運動刺激のかからない状態で筋分化を促進する効果があることが示された。

ジンゲロールもショウガオールと同様の傾向が示されたが，ショウガオールに比べるとその傾向は小さく，有意差のつかないものも多かった。シ

ショウガ辛味成分による C2C12 細胞への影響は、ショウガオールで大きいことが明らかとなった。

2. 筋原繊維構造の構築に与える影響

C2C12 細胞は分化誘導培地中での培養で筋管細胞へ、さらに電気刺激をかけることで筋原繊維への分化が促進されると言われている。今回、速筋型ミオシン重鎖の抗体を用いて筋原繊維に特徴的なサルコメア構造を可視化したところ、電気刺激前からサルコメア構造が構築されている様子を観察することができ、電気刺激によってその構造がよりはっきりと明確になる様子を観察することができた。これはショウガオール、ジンゲロール処理を行った細胞でも同様であった。

一方、電気刺激(-)、電気刺激(+)の各コントロール細胞と比較すると、ショウガオール処理を行うことによって、ミオシン重鎖のサルコメア構造構築が弱まる傾向が観察された。この傾向は電気刺激(+)下で顕著であった。ジンゲロールではこのような傾向はみられず、コントロール細胞同様きれいなサルコメア構造が観察された。

3. ミトコンドリア量および細胞内 ATP 量に与える影響

ATP 産生の要であるミトコンドリアは筋管細胞への分化に伴って増加する。単位面積当たりのミトコンドリア数を反映して蛍光強度が増加する MitoTracker Green 染色像を比較したところ、電気刺激の有無に関わらず、C2C12 細胞のミトコンドリア量はショウガ辛味成分によって増加する傾向にあり、その傾向はショウガオールよりジンゲロールで強いことが明らかとなった。

細胞内 ATP 量は、電気刺激(-)環境でジンゲロール処理群で有意な増加が見られた。ジンゲロール処理によりミトコンドリア量が増加し、それに伴って ATP 産生量も増加したと考えられた。これに対して電気刺激(+)環境では、ジンゲロール群で ATP 量が有意に減少しており、電気刺激(-)環境での効果と異なっていた。ジンゲロール群では ATP 産生量の増加とともに、電気刺激で誘導される筋収縮もコントロール群と比較して促進されている可能性があり、その結果 ATP 消費量もコントロール群より増加し、その収支として ATP 量が減少していた可能性が考えられた。一方、ショウガオールでは、電気刺激(-)、(+)のいずれにおいても有意差はなかったが増加傾向が見られ、ミトコンドリ

ア量の増加傾向を反映した結果となった。

4. まとめと今後の課題

実験結果から、ジンゲロールは骨格筋のミトコンドリア量を増加させ ATP 合成を促進する効果があること、電気刺激時の筋収縮力を増加させる可能性があることが示された。一方、ショウガオールには、糖の取り込みおよび糖代謝を促進する効果が見られ、血糖降下作用をもつ可能性が示唆されたが、ミトコンドリア量および ATP 合成は増加する傾向は見られるが有意差はなく、サルコメア構造構築を抑制する傾向も観察されたことから筋収縮力増強への効果は限定的であると考えられた。

筋線維には大きく分けると遅筋と速筋という 2 つのタイプがある。速筋のサルコメア構造は密で、収縮力が強い一方、遅筋は比較的細くサルコメア構造も弱い反面、ミトコンドリアは多く持久力に寄与するとされている。C2C12 細胞は速筋の細胞モデルと考えられているが、弱い電気刺激を連続的にかけることで、一時的に遅筋に変化することが報告されている。本研究より、ショウガオールには、遅筋化を促す効果がある可能性が浮上した。ショウガオールは糖取り込みおよび糖代謝を促すが、細胞内 ATP 量の上昇は限定的で、速筋型ミオシン重鎖のサルコメア像は弱くなる傾向が見られた。ここでは結果を示さなかったが、タンパク質の mRNA 発現量変化から、脂肪酸合成の上昇、脂質利用系の活性化が示唆されており、遅筋への質的变化を促している可能性が高い。遅筋型ミオシン重鎖の変化を調べるのが今後の課題である。

主要参考文献

- [1] Taku Nedachi *et al.*, Contractile C2C12 myotube model for studying exercise-inducible responses in skeletal muscle, *Am. J. Physiol. Endocrinol. Metab.*, 295(5):E1191-204 (2008).
- [2] 武田伸一 他, 実験医学 Vol.36 No.7 (増刊) 超高齢社会に挑む 骨格筋のメディカルサイエンス, p.14~114, p.128~163, 羊土社 (2018).
- [3] Chien-Kei Wei *et al.*, 6-Paradol and 6-Shogaol, the Pungent Compounds of Ginger, Promote Glucose Utilization in Adipocytes and Myotubes, and 6-Paradol Reduces Blood Glucose in High-Fat Diet-Fed Mice, *Int. J. Mol. Sci.*, 18(1). pii: E168 (2017).

パラミロンの摂取が食餌性肥満モデルマウスの 糖代謝および脂質代謝に及ぼす影響

Effects of paramylon supplementation on glucose and lipid metabolism
in diet-induced obese model mice

瀬藤 琴音

Kotone Koketsu

大妻女子大学大学院 人間文化研究科 人間生活科学専攻 健康・栄養科学専修

キーワード：パラミロン，ユーグレナ，代謝

Key words : Paramylon, Euglena, Glucose metabolism

1. 目的

ユーグレナ(学名：Euglena gracilis, 和名：ミドリムシ)は、単細胞の微細藻類で、近年新しい健康食品の材料として注目されている。島田らによれば、OLETF ラットにユーグレナ含有飼料を摂取させることで、高血糖が改善し、食事摂取量や体重増加量、腹部脂肪の減少が認められたと報告している。中でも食物繊維であるパラミロンは、ユーグレナの特有成分であり、食物繊維素材としての有用性が期待されている。既報では、パラミロン摂取によりアトピー性皮膚炎症状の改善効果があることが示された²⁾。しかし肥満に対するパラミロンの有効性を検討した報告はほとんどない。本研究では、パラミロンの摂取が食餌性肥満モデルマウスの糖代謝および脂質代謝に及ぼす影響について検討した。

2. 方法

《実験①:パラミロン量の異なる2つのユーグレナ菌株が食餌性肥満モデルマウスの糖代謝および脂質代謝に及ぼす影響》5週齢のC57/BL6Jマウスを1群10匹の3群に分けた。実験飼料はAIN-93G組成を基本とし、脂肪エネルギー比が50%になるようラードを添加した。総食物繊維量が5.0%になるように、セルロースを添加したものを対照群(C群)とした。試験群はユーグレナZ株群(Z群)、ユーグレナEOD-1群(E群)とした。E群はEOD-1株を総食物繊維が5.0%になるように添加し、Z群はZ株をEOD株と同量添加し、セルロースで調整し

た。飼育期間中は飼料及び水を自由摂取させた。

《実験②:パラミロンの糖代謝および脂質代謝に及ぼす用量反応性の評価》5週齢のC57/BL6Jマウスを1群10匹の3群に分けた。実験飼料はAIN-93G組成を基本とし、脂肪エネルギー比が50%になるようラードを添加した。実験①と同様に総食物繊維量5.0%になるようセルロースを添加したものを対照群(C群)とした。試験群として、パラミロンを総食物繊維量2.5%添加群(L群)、5.0%添加群(H群)とした。飼育期間中は飼料及び水を自由摂取させた。

《実験③:アモルファス化パラミロンの糖代謝および脂質代謝に及ぼす影響》パラミロン粒子が耐糖能改善および脂質代謝の効果の主体であるかを調べるために、強アルカリ溶液で溶解し、繊維状にしたパラミロン(アモルファス化パラミロン)を作成し、検討した。5週齢のC57/BL6Jマウスを1群10匹の3群に分けた。実験飼料はAIN-93G組成を基本とし、脂肪エネルギー比が50%になるようラードを添加した。実験①、②同様に総食物繊維量5.0%になるようセルロースを添加したものを対照群(C群)とした。試験群として、総食物繊維量5.0%になるようパラミロンを添加したものをパラミロン群(P群)、同量のアモルファス化パラミロンを添加したものをアモルファス群(A群)とした。飼育期間中は飼料及び水を自由摂取させた。

実験①～③共に、飼育10週目に8時間絶食後、20%グルコース溶液を投与し耐糖能試験(OGTT)を行った。解剖時、8時間絶食後に心臓から採血

し、肝臓、脂肪組織を摘出後に重量測定した。血清脂質は酵素法、血清ホルモン濃度は ELISA 法にて測定した。肝臓脂質は Folch 法で抽出した後、酵素法にて測定した。糞中脂質は凍結乾燥後に粉碎し、4%酢酸含有 Folch 溶液にて抽出した。肝臓の mRNA 発現量は、リアルタイム PCR 法にて測定した。

3. 結果と考察

《実験①》マウスの成長は各群間で同等であり、肝臓重量脂肪組織重量、盲腸重量に有意差は見られなかった。OGTT における 60 分値が C 群と比較して Z 群、E 群の順に有意に低値を示した。一方空腹時のインスリン値に有意差はなく、インスリン分泌量に差はなかった。血清トリグリセリド濃度および遊離脂肪酸濃度に有意差はなく、血清コレステロール濃度においても血清コレステロール濃度では C 群に比べて E 群が低値を示したが、統計的な有意差はなかった。以上の結果より、パラミロン量に応じて耐糖能が改善し、脂質代謝にも影響する可能性が考えられた。

《実験②》飼料効率および LDL-コレステロール値、腹腔内脂肪重量において用量依存性を示し、C 群と比較して H 群が有意に低値を示した。また盲腸重量において用量依存性を示し、C 群と比較して H 群が有意に高値を示した。肝臓の PPAR α の mRNA 発現量において用量依存性を示し C 群と比較して H 群が有意に高値を示した。PPAR α と CPT1 および ACOX 間に有意な正の相関性が認められたことから、PPAR α の発現亢進により脂肪の β 酸化亢進が起きたと推定した。以上の結果より、マウスの糖代謝および脂質代謝において、パラミロンの用量反応性が認められた。

《実験③》終体重、体重増加量、後腹壁脂肪重量、腸間膜脂肪重量において、C 群と比較して A 群が有意に低値を示した。盲腸重量において、C 群と比較して P 群および A 群が有意に高値を示した。また、飼料効率において C 群と比較して P 群および A 群で有意に低値を示した。OGTT における 30 分値で C 群および P 群と比較して A 群が有意に低値を示し、60 分値で C 群と比較して A 群が有意に低値を示した。また IAUC では、C 群と比較して A 群が有意に低値を示した。しかし血清イ

ンスリン濃度に有意差が見られず、インスリン感受性の差であると推定された。血清レプチン濃度において、C 群と比較して A 群が有意に低値を示した。以上の結果より、パラミロン粒子よりも繊維状にすることによって、糖代謝や脂質代謝の改善効果がより顕著になることが示された。

4. まとめと今後の課題

本研究では、近年新しい健康食品素材として注目されているユーグレナの特有成分であるパラミロンには、インスリン感受性を高めることで耐糖能改善効果を有していること、コレステロール代謝や脂質代謝改善にも影響があり、それは脂肪の β 酸化が関連していること、パラミロン顆粒を解繊することで耐糖能改善効果や脂質代謝改善効果がより顕著になることが示唆された。

実験①では、コレステロール代謝におけるユーグレナおよびパラミロンの影響を検討し、コレステロール代謝関連酵素の肝臓 mRNA 発現が確認されたが、血清総コレステロール濃度に有意差は見られなかった。また実験②、実験③では、血清 LDL-コレステロール濃度の有意な低下が認められたが、今後パラミロンとコレステロール代謝の関連性をより検討すべきである。Exp1~3 を通して PPAR α の発現量上昇が確認された。さらに Exp2 では PPAR α と ACOX, CPT1 の相関が確認され、パラミロン摂取によって脂肪の β 酸化が亢進し、PPAR α の発現量が亢進したことが示された。しかし血清脂質や肝臓脂質に有意な低下は見られず、肝臓 mRNA と脂質代謝項目との関連性や作用機序を詳細に検討する余地がある。

主要参考文献

- [1] Ryoko Shimada, Miho Fujita, Masahiro Yuasa, Hiromi Sawamura, Toshiaki Watanabe, Ayaka Nakashima. Kengo Suzuki : Oral administration of green algae, *Euglena gracilis*, inhibits hyperglycemia in OLETF rats, a model of spontaneous type 2 diabetes : *Food&Function*, 2016, 4655, 7
- [2] Sugiyama A, Hata S, Suzuki K, Yoshida E, Nakano R, Mitra S, Arashida R, Asayama Y, Yabuta Y, Takeuchi T : Oral administration of paramylon, a beta-1,3-D-glucan isolated from *Euglena gracilis* Z inhibits development of atopic dermatitis-like skin lesions in NC/Nga mice : *J. Vet. Med. Sci.*, 72, 755-763. (2010)

若年女性における骨格筋の問題点とその多面的改善法に関する研究

Research on the problems of skeletal muscle of young female
and on the development of multi-faced approach for improve them

萩原 千晴

Chiharu Hagiwara

大妻女子大学大学院 人間文化研究科 人間生活科学専攻 健康・栄養科学専修

キーワード：若年女性，骨格筋，サルコペニア

Key words : Young female, Skeletal muscle, Sarcopenia

1. 研究背景・目的

近年，若年女性の多くが歪んだボディイメージに基づく極端なやせ願望を持っており，やせ女性の比率が高いことは先進国の中ではわが国に特徴的な現象である。それだけでなく，若年女性の運動機会減少が顕著であり，低骨格筋量の者の増加が危惧される。骨格筋は「運動」「代謝」「貯蔵」といった重要な機能があり，減少することで運動機能低下や日常活動における身体能力低下のみならず，代謝障害を引き起こし，肥満や2型糖尿病といった生活習慣病の発症・重症化に関与することが考えられる。骨格筋は加齢に伴い減少するため，若年期から十分な骨格筋量を維持し，質を高めることが重要である。

そこで本研究では，骨格筋量がサルコペニアのカットオフ値（骨格筋指数=5.7 kg/m²）未満に相当する若年女性の実態を調査し，低骨格筋量の原因となる生活習慣要因を明らかにすること，若年女性の筋量増加および筋力向上を目指した効果的な多面的介入法を構築することを目的とした。

2. 方法

<第一章>

O 大学に在籍した女子学生 766 名 [20.7±1.2 歳，BMI 20.4±2.1 kg/m²（平均値±標準偏差）] を対象とし，同時多周波インピーダンス法による体組成測定，握力測定を実施し，若年女性の骨格筋量および筋力の実態について調査した。

<第二章>

若年女性の骨格筋が少ない原因が生活習慣因子にあるのではないかと考え，体組成測定，握力測定，質問票による食習慣調査（BDHQ）および身体活動量調査（IPAQ），座位時間調査，階段利用意識調査を実施し，さらに酸化ストレスマーカーである尿中 8-hydroxy-2'-deoxy guanosine（8-OHdG）の測定を行い，各因子と骨格筋との関連について検討した。

<第三～六章>

低骨格筋量の若年女性の骨格筋量増加および筋力向上を目指し，たんぱく質摂取と運動の併用効果を検証した。たんぱく源として，我々の食経験が豊富な卵，なかでも分岐鎖アミノ酸や含硫アミノ酸を豊富に含む卵白に注目した。被験食品として手軽に摂取可能な卵白たんぱく質飲料を用い，運動は，低骨格筋量の若年女性でも継続可能な中強度インターバルトレーニング [ITR：中強度（ボルグスケール 14）×3 分と低強度（40W）×2 分の繰り返し 3 回] を採用した。対象は，骨格筋量がサルコペニアのカットオフ値未満に相当する若年女性 66 名 [20.9±1.0 歳，骨格筋指数 5.19±0.49 kg/m²（平均値±標準偏差）] とし，これを「卵白たんぱく質飲料+ITR 群（11 名）」，「豆乳+ITR 群（13 名）」，「ITR 単独群（15 名）」，「卵白たんぱく質飲料単独群（5 名）」，「豆乳単独群（7 名）」，「コントロール群（15 名）」の 6 群に分けた。介入期間は 8 週間とし，飲料を摂取する群は毎日 200ml（たんぱく質：約 8g）摂取し，ITR を実施する群は自転

車エルゴメーターを用い、週 2 回 (17 分/回) 実施した。介入前後で、体組成、筋力 (握力・等尺性膝伸展力・等速性脚伸展パワー)、採血・採尿を行い、血中アミノ酸濃度と尿中 8-OHdG を測定した。

3. 結果と考察

<第一章>

若年女性の約 30% がサルコペニアレベルの骨格筋量であり、骨格筋量、握力ともにサルコペニアの基準に該当する者は約 2% 存在した。その原因として、国民健康・栄養調査で示されている 20 歳代女性の運動習慣者の減少傾向 (2003 年: 15.3% → 2017 年: 11.7%) やエネルギー摂取量の減少

(1995 年: 1866 kcal/日 → 2016 年: 1631 kcal/日)、年代別に確認した際、朝食欠食が 20 歳代女性で最も多い (2017 年: 23.6%) ことなどが考えられた。

<第二章>

食習慣において、骨格筋量とエネルギー摂取量 (kcal/日)、たんぱく質摂取量 (g/日) との間に正相関が確認された。しかし、体重あたりのたんぱく質摂取量 (g/体重 kg/日) との関連は見られなかった。つまり、若年女性の骨格筋量が少ない原因としてエネルギー摂取量不足に伴うたんぱく質等各栄養素摂取量不足の可能性が示唆された。

活動量においては、身体活動量 (METs・時/週) が多い者ほど骨格筋量が多いことが確認された。また座位時間においては、1 日あたりの座位時間が長い者ほど骨格筋量が少なく、体脂肪率が高い結果が得られた。さらに、日常的な階段利用意識のある者はない者と比較して、骨格筋量が多いことが明らかとなった。これらの結果から活動量低下に伴い、たんぱく質同化作用 < たんぱく質異化作用となり、骨格筋量減少や筋力低下が引き起こされている可能性が示唆された。

酸化ストレスが骨格筋に影響する可能性も考えられ、特に不活動の者は酸化ストレスが高いとの報告がある。本研究において、骨格筋量が少ない者ほど酸化ストレスが高い傾向が示された。骨格筋量と酸化ストレスの因果関係は明らかになかったが、酸化ストレスが低骨格筋量の原因となっている可能性がある。酸化ストレスによりミト

コンドリアが機能不全となり、最終的に炎症性サイトカインが分泌され、筋たんぱく質分解が高まることで、骨格筋量が減少する可能性が考えられる。今後、若年女性を対象とし、炎症性サイトカインやミトコンドリアの機能 (筋有酸素能) などを評価する必要がある。

<第三～第六章>

本研究による 8 週間の介入により、全ての群において、体組成に臨床的意義のある変化は認められなかった。しかし、筋力において、卵白+ITR 群、豆乳+ITR 群、ITR 単独群、豆乳単独群で脚伸展パワーの有意な上昇が確認された。特に、脚伸展パワーの変化量は卵白+ITR 群が大きかった。尿中 8-OHdG は卵白+ITR 群で有意な低下が認められたことから、卵白たんぱく質飲料と ITR の併用が酸化ストレス改善と筋力向上に寄与した可能性が示唆された。

以上の結果より、本研究で実施した ITR は低体力者に適した運動であり、それに加えて抗酸化作用をもつ含硫アミノ酸を豊富に含む卵白のようなたんぱく質を摂取することが、若年女性の筋力向上に有効であると考えられる。

4. まとめと今後の課題

本研究において、若年女性の約 30% がサルコペニアのカットオフ値 ($SMI=5.7 \text{ kg/m}^2$) 未満に相当する骨格筋量であることが明らかとなった。その要因として、摂取エネルギー不足や身体活動量低下、座位時間が長いこと、階段利用意識低下などが挙げられ、また不活動から派生する酸化ストレス増加による影響も考えられた。若年女性の筋力を改善する方法として、自転車エルゴメーターを用いた週 2 回、8 週間の ITR は有効であったものの、骨格筋量を増やすまでには至らなかった。

今後の課題として、本研究では都心の大学に通う女子大学生を対象としていたが、集団を固定せずにより多くの 20 歳代若年女性の現状を調査すること、骨格筋量が少ない原因をホルモンや炎症性サイトカインの視点から追究すること、また介入期間や運動プロトコル、運動頻度を見直した検討を行うことが必要であると考えられる。

大麦品種BARLEYmaxの摂取がマウスの腸内代謝に及ぼす影響

Effects of BARLEYmax cultivar on intestinal metabolism in mice

不破 未貴

Miki Fuwa

大妻女子大学大学院 人間文化研究科 人間生活科学専攻 健康・栄養専修

キーワード：食物繊維，腸内代謝，腸内細菌，消化管免疫

Key words : Dietary fiber, Intestinal metabolism, Intestinal bacteria, Digestive tract function

1. 目的

大麦は他の穀物と比べて水溶性食物繊維が多く含まれており，特に大麦β-グルカンはいままで血中コレステロール低下作用や，食後血糖値上昇抑制作用など，優れた健康維持機能が報告されている．本研究で用いた大麦品種BARLEYmaxは，オーストラリア連邦科学産業研究機構(CSIRO)が約10年の歳月をかけて開発した非遺伝子組み換え大麦であり，通常の大麦と比較してβ-グルカン，フルクタン，レジスタントスターチといった発酵性食物繊維類を多く含んでいることが特徴である．

そこで本研究ではBARLEYmaxに含まれるこれら発酵性食物繊維類のそれぞれの特性の違いに着目し，BARLEYmaxの摂取がマウスの主要腸内細菌数，腸内発酵産物ならびに消化管機能に及ぼす影響について明らかにすることを目的とした．

Exp.1では，BARLEYmaxの摂取がマウスの腸内代謝に及ぼす影響を通常品種の大麦ハインドマーシュと比較検討した．さらにExp.2ではBARLEYmaxに含まれるフルクタンが腸内代謝に及ぼす影響を検討するため，通常の大麦にBARLEYmaxと同量のフルクタンを添加することにより，フルクタンの機能性の解明を試みた．Exp.3ではBARLEYmaxが消化管機能に及ぼす影響は，短鎖脂肪酸を介したもののなかどうか検討するため，短鎖脂肪酸受容体ノックアウトマウスを用いて実験を行った．

2. 方法

大麦品種としてβ-グルカン，フルクタン，レジスタントスターチを含むBARLEYmax(Hordeum vulgare var. Himalaya292)及び通常大麦品種のハインドマーシュ(豪州産)を用いた．

Exp.1：AIN-93G組成の飼料を基本に，脂肪エネルギー比が25%となるようにラードを配合した飼料を対照(以下CO群)とし，BARLEYmax(以下BM群)を総食物繊維が5%となるようにコーンスターチと置換した．ハインドマーシュ(以下HM群)はBM群と同量配合し，セルロースで総食物繊維量を調整した．5週齢のC57BL/6J雄マウスを1群10匹の3群に分け，試験飼料を15週間給餌した．解剖時に摘出した盲腸内容物より有機酸を抽出後，誘導体化してGC/MSにて測定した．また腸内細菌数，回腸のL細胞マーカーのmRNA発現量はリアルタイムPCR法で測定し，血清sIgA濃度はELISA法によって測定した．

Exp.2：CO群及びBM群の飼料組成はExp.1と同じとし，HM群はBARLEYmaxに含まれるフルクタンと同量になるようイヌリン(フルクタンが主成分)を添加し，総食物繊維量が5%となるようセルロースで調整した．5週齢のマウスを1群10匹の3群に分け，試験飼料を12週間給餌した．測定項目はExp.1と同様に行った．

Exp.3：飼料組成はExp.1と同じとし，GPR43ノックアウトマウスを体重が均一となるよう1群10匹の3群に分け，試験飼料を12週間給餌した．測定項目はExp.1と同様に行った．

3. 結果と考察

Exp.1: 大麦品種BARLEYmaxと通常品種大麦の摂取がマウスの腸内代謝に与える影響

マウスの成長は各群間で同等であったが，盲腸重量でHM群に比べ，CO群，BM群で有意に高かった．糞便中の腸内細菌数はBacteroides属，Lactobacillus属，Clostridium leptum subgroup，

Clostridium coccoides group で CO 群に比べて BM 群, HM 群で有意に高く, Prevotella 属では CO 群, HM 群に比べ BM 群で有意に高かった. また, 盲腸あたりの総短鎖脂肪酸量, 酢酸量は CO 群と比べて BM 群で高い傾向を示し($p=0.081, p=0.063$), コハク酸量は HM 群に比べて BM 群で有意に高かった. 消化管機能は回腸の L 細胞マーカーを測定することにより検討した. L 細胞マーカーである GPR43, PPAR β/δ , PC 1 の mRNA 発現量が HM 群と比べて BM 群で有意に高く, 血清 sIgA 濃度では HM 群と比べて BM 群で有意に高かった.

以上の結果より, BARLEYmax はマウスの腸内細菌を介して腸内代謝を活性化することが認められ, 消化管免疫の活性化にも有用である可能性が示唆された. BM 群と HM 群の腸内代謝の影響の差はフルクタン, レジスタントスターチの影響と考えられた.

Exp.2: 大麦品種 BARLEYmax に含まれるフルクタンがマウスの腸内代謝に及ぼす影響

マウスの成長は各群間で同等であったが, 盲腸重量で CO 群に比べ, HM 群, BM 群で有意に高かった. 盲腸内容物の腸内細菌数は Clostridium coccoides group で CO 群, HM 群に比べ BM 群で有意に高く, Lactobacillus 属で CO 群, BM 群に比べ HM 群で有意に高かった. Bacteroides 属, Prevotella 属, Clostridium leptum subgroup では CO 群に比べて HM 群, BM 群で有意に高かった. Prevotella 属の増加は, フルクタンを添加した場合に見られたことから, フルクタンの影響であることが示唆された. 盲腸あたりの有機酸量は, プロピオン酸及び酪酸量で CO 群と比べて BM 群で有意に高かった. L 細胞マーカーである GPR43, PC2 の mRNA 発現量が CO 群, HM 群と比べて BM 群で有意に高く, NGN3, NeuroD では CO 群と比べて BM 群で有意に高い結果となった.

以上の結果より, 腸内細菌叢の改善には β -グルカンとフルクタンが関与していることが示され, 血清 sIgA 濃度の増加, L 細胞マーカー発現量の増加は BM 群で主に見られたことから, 消化管機能の改善には BARLEYmax の摂取が有効である可能性が考えられた. 食物繊維類を段階的に発酵する BARLEYmax の特有の構造, あるいは BARLEYmax にもう一つ特徴的に含んでいるレジスタントスターチが関与している可能性が考えられた. そして, 回腸 L 細胞マーカーの mRNA 発現量の結果では,

Exp1, Exp2 の両者で共通して有意差が見られたのは GPR43 であったため, Exp3 では GPR43 ノックアウトマウスを用いて BARLEYmax の摂取が, 消化管機能に及ぼす影響について比較検討した.

Exp.3: 大麦品種 BARLEYmax の摂取が GPR43 ノックアウトマウスの腸内代謝に及ぼす影響

マウスの成長は各群間で同等であったが, 盲腸重量で CO 群に比べ, HM 群, BM 群で有意に高かった. 盲腸あたりの有機酸量ではイソ吉草酸, コハク酸量で CO 群に比べ, BM 群で有意に高い結果となった. その他の有機酸, 総短鎖脂肪酸量は, CO 群に比べ, いずれも BM 群, BM 群の順で有意に高い結果となった. 回腸の L 細胞マーカーでは PGCG で CO 群より HM 群で有意に低い結果となった. その他全ての測定マーカーにおいて有意差は見られなかった. 血清 sIgA 濃度でも有意差は見られず, マウスの BARLEYmax 摂取による消化管機能の改善は, GPR43 を介して行われている可能性が高いと考えられた.

本研究では消化管機能の改善には BARLEYmax の摂取が有益であることが示唆された. 特に BARLEYmax の摂取が GPR43 の mRNA 発現に関与するという事は新しい知見であった. そして GPR43 ノックアウトマウスでは, 大麦摂取群で短鎖脂肪酸が増えているにもかかわらず, 消化管機能に影響を及ぼさなかったことから, 食物繊維類は単独で摂取するのではなく, 複合体として摂取することでその効果がより顕著に表れる可能性が考えられた.

4. まとめと今後の課題

本研究では BARLEYmax に含まれる発酵特性の異なる食物繊維類が, それぞれ腸内にどう影響するかを確認するため, 総食物繊維量を 5%と同量になるよう飼料を調整したが, BARLEYmax は一般大麦と比較して総食物繊維量が約 2 倍含まれるため, 大麦の量として同程度摂取した場合には, さらなる BARLEYmax の健康増進効果が期待できるかもしれない. また, 腸内細菌叢の変化を確認しやすくするため, 本研究では高脂肪食ではなく中脂肪食下で行ったが, 肥満マウスにおいては消化管機能にどう影響を及ぼすのか, さらなる研究が必要である. そして人々の腸内環境を改善できる容易な方法として, BARLEYmax の摂取がより身近なものとなることを願う.

間質性膀胱炎患者の食事指導教育ツールにおける 満足度に関する検討

Validation of instructional materials for patients with interstitial cystitis

森 由香子

Yukako Mori

大妻女子大学大学院 人間文化研究科 人間生活科学専攻 健康・栄養科学専修

キーワード：人間，生活，文化，間質性膀胱炎，食事指導教育ツール

Key words : Human, Life, Culture, Interstitial cystitis, Instructional materials

1. 目的

近年増加傾向にある間質性膀胱炎患者は、主症状である膀胱部痛や頻尿を増悪させる食品の摂取量や摂取回数をコントロールすることで QOL を向上することができる。海外の研究を基に作成された間質性膀胱炎患者の症状緩和・予防の食品リスト表が食事指導教育ツールとして日本人の患者に適切に寄与し、満足されているのか検討した。

2. 研究方法

2017 年 7 月 1 日～2018 年 5 月 15 日の期間、四谷メディカルキューブ泌尿器科外来を受診し、水圧拡張術で間質性膀胱炎と診断された女性患者 50 名、平均年齢 61±14 歳を対象とした。外来受診日に質問票を用いたアンケート調査を実施した。アンケートは患者の外来受診時に研究への同意を求め、承諾を得た後に受診待時間内に記入をお願いし、受診後に回収した。

質問票の作成は、妥当性を確保している米国 Interstitial Cystitis Association が作成した食品リストに関する項目を含む 10 項目の質問アンケートを参考にした。質問票の内容は、日本の現状にあわせ 6 項目 20 問の詳細な質問に改変、追加し、食品リスト表は 1 項目 10 問とした。間質性膀胱炎の専門医へ質問項目が網羅しているか表面妥当性を確認した後に実施した。

回答の選択項目は「はい」「いいえ」「わからない」・「あった」「ない」「わからない」の 3 段階あるいは、「とてもそう思う」「思う」「どちらとも言えない」「あまり思わない」「全く思わない」・「全

く同じ」「ほぼ同じ」「わからない」「半分以上異なる」「全く異なる」の 5 段階で評価した。理由や具体的な食品に関しては記述式を採用した。症状緩和のために全体的に役立つか満足度に対する回答は「とてもそう思う」「思う」「どちらとも言えない」「あまり思わない」「全く思わない」の 5 段階で評価した。

3. 結果および考察

回答率は 50 名 100%であった。特定の飲食物をとることで症状の増悪、緩和を認める者が 33 人 (66%) で、増悪する食品は、コーヒー 19 人 (38%)、柑橘類 15 人 (30%)、香辛料 14 人 (28%)、酢 10 人 (20%)、酒・トマト 8 人 (16%)、緩和させる食品は、牛乳 7 人 (14%)、水 5 人 (10%)、ご飯 3 人 (6%) であった。食品リスト表の食品について食べた経験がある 19 人 (38%)、食べた経験がない 29 人 (58%)、わからない 2 人 (4%) で、経験のない食品としてマジョラン、タラゴン、ブリエチーズ、なつめ、フェタチーズ、プロテイン食品、エヴィアンが示された。

食品リスト表が、症状緩和に全体的に役立つかについて、とてもそう思う 6 人 (12%)、思う 25 人 (50%)、どちらともいえない 12 人 (24%)、あまり思わない 7 人 (14%)、まったく思わない 0 人 (0%) であった。食品リスト表が症状の緩和に満足であると回答した患者は 31 人 (62%) で、19 人 (38%) が満足を得られない意見であった。満足を得られない理由は、情報があてにならない (悪化食品を減らすが症状が変わらない、緩和食品に当てはまる

ものがない、緩和食品でも症状が変わらない)、実生活で活用できない(好きな食品はやめられない、日常的に摂らない食品が多い、自分で調理をしないため調味料がわからない、症状が進行すると何をたべても痛いと感じる、症状を増悪させる食品と生活習慣病予防のために良いとされる食品が同じであるため、どちらを優先して考えるべきか困惑する、症状を悪化させる食品でも少量であれば症状がでない)であった。食品リスト表は、日本人に馴染みの食品が少ない、日本独自の食品が無いなど日本人の食生活にあてはまる食品が少ないことが明らかとなった。

今後、日本人の食生活にあった食品リスト表にするためには、食品情報の見直し、提示方法、利用方法を検討する必要がある。患者満足度の高い食事指導教育ツールを考案し活用することは、日本人の間質性膀胱炎患者の症状緩和に求められていることが示唆された。

4. まとめと今後の課題

今回の研究結果から、約 60%以上の患者が食品リスト表は、症状の緩和に全体的に見て役立ち満足が高いという結果がえられ、現代かいの食品リスト表でも利用できそうだが、約 30%の患者が否定的な意見をもっていることもわかり無視できない。否定的な理由として、食品リスト表中の食品は、日本独自の食品がない、日本人の食生活に当てはまる食品が少ないためという理由が挙げられた。そのため、日本人になじみのない食品は、それを多く含む料理名で表記するなど、日本人の食生活にふさわしい食品リスト表の食品情報の見直し、提示方法、利用方法について検討し、満足度を上げる更なる改定が必要である。その結果、症状を緩和させる、症状を悪化させない食品の選択しながら、バランスのとれた食事が営まれ、健康寿命の延伸に寄与できることが望まれる。

主要参考文献

- [1] 武井実根雄, 山口秋人: 日常診療における間質性膀胱炎の重要性 シンポジウム 1: Female Urology の現状と展望 西日泌尿. 71: 277-280. 2009
- [2] 本田之夫, 山田哲夫, 伊藤貴章, 上田朋宏, 武井実根雄, 桂田正子: 日本間質性膀胱炎研究会編 間質性膀胱炎第 2 版 疫学から治療まで, p.22-60

医学図書出版株式会社, 2006

[3] 武井実根雄: 間質性膀胱炎の診断と治療 特集 女性骨盤底医学の最前線 排尿障害プラクティス Vol.14 No.3: 31-38. 2006

[4] 日本間質性膀胱炎研究会ガイドライン作成委員会編: 間質性膀胱炎診療ガイドライン, 第 1 版, p.7-37 ブラックウェルパブリッシング, 2008

[5] 日本間質性膀胱炎研究会ガイドライン作成委員会編: 間質性膀胱炎診療ガイドライン, 第 1 版, p.7-37 ブラックウェルパブリッシング, 2008

[6] Barbara Shorter, Martin Lesser, Robert M. Moldwin, Leslie Kushner: Effect of Comestibles on Symptoms of Interstitial Cystitis, the Journal of Urology Vol.178,145-152, July 2007

[7] 大岡均至: 女性間質性膀胱炎症例に対する補完代替医学療養としての dietary manipulation について, 日本泌尿器科学会雑誌 Vol.107 No.3, 176-182 July 2016

酸性飲料による酸蝕歯発生リスク評価法の確立とアルカリイオン水による エナメル質再石灰化促進効果の検討

Establishment of risk assessment method for tooth erosion by acidic beverage, and examination of enamel remineralization promotion effect of alkaline ionized water

鈴木 恵

Megumi Suzuki

大妻女子大学大学院 人間文化研究科 人間生活科学専攻 生活環境学専修

キーワード：酸蝕歯，酸性飲料，アルカリイオン水，再石灰化

Key words : Tooth erosion, Acidic beverage, Alkaline ionized water, Remineralization

1. 目的

齲蝕は口腔に生息するう蝕原性細菌によって発症する感染症であり，さらに食生活をはじめとする様々な生活習慣が関係する生活習慣病でもある。わが国の齲蝕有病者率は概ね減少傾向を示しているが，先進諸国の中ではいまだ高い数値となっている。一方，細菌が関与する齲蝕とは異なり，強酸による歯の化学的な損傷である酸蝕歯がある。酸蝕歯は，酸を取り扱う労働者にみられる職業病として，比較的古くから知られている。この産業保健上，重要な酸蝕歯とは別に，現在，酸性度の高い飲食物に起因する酸蝕歯が増加傾向にあることが，国内外の疫学調査によって報告されている。わが国でも，熱中症や脱水予防の目的でスポーツ飲料等を摂取する機会が多い運動選手や幼児・高齢者を中心にして，酸蝕歯の罹患が危惧されており，その対策が喫緊の課題となっている。アルカリイオン水（Alkaline Ionized Water : AIW）は，JIS規格（JIS T2004）を有する家庭用電解水生成器（アルカリイオン水整水器）を用いて水道水を電気分解することで，陰極から生成する弱アルカリ性（pH9～10）の飲用可の電解水である。AIWは胃腸症状の改善等に効果的であることが知られているが，我々は口腔保健学的にも有用な機能水であることを報告している。AIWは製法上の特性によりミネラルを主体とした陽イオンを比較的多く溶存しており，それらが歯質の脱灰・再石灰化に関与することが推測される。

本研究では，酸性飲料の酸蝕歯リスク評価法の

確立を目的として，エナメル質表面の pH 測定法を検討した。さらに，初期齲蝕を可視化できる光誘導蛍光定量法（QLF）を再石灰化評価に応用し，AIWの再石灰化に及ぼす効果を検討した。併せて，走査型電子顕微鏡（SEM）による表面形態の観察を行った。

2. 対象および方法

1) 酸蝕歯発生リスク評価法の実験：エナメル質表面の pH 測定

対象者は，本研究の主旨を口頭と文書にて説明した後，同意の得られた 20 歳の女性を被験者とした。なお，被験者は，未処置の齲蝕歯やその他の口腔疾患および全身疾患の認められない者とした。

(1) 方法

①エナメル質表面の pH 測定：安静時の測定
エナメル質表面の pH は，口腔内用 pH アンチモン電極 SP-Sb-052, pH Meter PH-201Z および PC からなる連続測定システムを用いて測定した。測定部位は上顎左側臼歯部の頬側面とし，安静時と酸性飲料の摂取前後に行った。なお，今回は 10 秒毎のデータを記録した。

②飲料摂取後の測定：実験に用いた酸性飲料は，スプライト[日本コカ・コーラ(株)]で，事前に pH ガラス電極にて pH を測定した。飲料の摂取法は，50ml を口に含み，口腔内全体に行きわたるようにした後，一気に飲み込んでもらった。飲料摂取後のエナメル質表面の pH は，前述の方法にて測定した。

③唾液の pH 測定：唾液の採取は，無刺激唾液を

採唾カップに吐出してもらった。被験者に対して、採取前 2 時間は激しい運動や飲食をしないことを伝えた。また、唾液分泌に影響を及ぼす可能性がある薬物を服用していないことを確認した。pH は pH ガラス電極を用いて測定した。

2) エナメル質の脱灰・再石灰化実験

(1) エナメル質試料：脱灰・再石灰化の評価に用いる材料として新鮮抜去牛歯を用いた。

(2) アルカリイオン水 (AIW)：連続式電解還元水生成器を用いて生成した (pH 10.0)。

(3) エナメル質の脱灰方法：脱灰は、酸性飲料による酸蝕を想定し、市販の炭酸飲料[スプライト、コカ・コーラ(株)]に 12 時間、無攪拌で浸漬することにより行った。液量は 5 試料当たり 40ml で、温度は室温 (20°C) とした。

(4) エナメル質の再石灰化方法：再石灰化は、脱灰試料を表 1 に示す溶液のいずれかに 37°C で 7 日間、無攪拌で浸漬することによって行った。pH は 10M KOH 溶液で調整し、試料数は 1 群 10 例とした。

5) QLF 法による脱灰・再石灰化の評価とミネラル分析：脱灰後と再石灰化後に、QLF-D システム

(Inspektor Research Systems, オランダ) で同一試料のミネラル量の変化について蛍光減少率最大値 ΔF_{max} (%) を指標として評価した。 ΔF_{max} (%) は健全部の蛍光強度を 100% としたときの脱灰部の蛍光減少率の最大値で、脱灰深度およびミネラル喪失量と相関する測定値である。再石灰化の程度は、脱灰直後と再石灰化後の ΔF_{max} 値の変化量 $\Delta\Delta F_{max}$ (%) により評価した。なお、AIW のカルシウムイオン濃度は OCPC 法で、無機リン濃度はリン・モリブデン酸法で測定した。

6) SEM 観察による脱灰・再石灰化の評価：酸性飲料あるいは AIW に浸漬させたエナメル質の表面形態を SEM にて観察した。

7) 統計学的解析：QLF 法による再石灰化実験の結果については、一元配置分散分析 (ANOVA) と多重比較 (Student's Newman-Keul's test) を行った (有意水準： $p < 0.05$)。

3. 結果および考察

1) エナメル質表面の pH：安静時のエナメル質表面の pH を連続 5 分間測定した結果、被験者の安静時におけるエナメル質表面の pH は 5.9 (中央値) であり、同時に測定した唾液の pH は 6.9 であった。

2) スプライトの pH とスプライト摂取前後のエナメル質表面の pH：スプライトの pH は 2.8 であっ

た。スプライト取前のエナメル質表面の pH は約 6 を示していたが、摂取後に急速に低下し、摂取 110 秒後では 3.3 となった。その後、pH は上昇し、280 秒後に摂取前の pH に戻った。

3) スプライトによるエナメル質の脱灰：スプライトに 12 時間浸漬した時のエナメル質試料の脱灰度を QLF 法で評価した結果、脱灰の指標となる ΔF 値は平均 20.4%、標準偏差は 3.4% であった。

4) QLF 法による再石灰化の評価：再石灰化システムにおいて、各溶液で 24 時間処理した時の QLF 法における測定結果を図 10 に示す。 $\Delta\Delta F_{MAX}$ には 3 群間で有意差が認め ($P=0.031$; ANOVA), AIW で処理した C 群の値 ($7.4 \pm 4.9\%$) は、A 群 ($2.8 \pm 3.8\%$) あるいは B 群 ($2.6 \pm 4.1\%$) に比べ約 2.5 倍高く、多重比較でその差は有意であった ($P < 0.05$; Student's Newman-Keul's test)。

5) 形態学的観察による再石灰化の評価：再石灰化後の各エナメル質試料の光学顕微鏡像では、明らかな変化は見られなかった。SEM 観察では、AIW に浸漬したエナメル質表面に無機質の沈着と思われる像が多く観察された。

以上の結果から、口腔内アンチモン電極を用いたエナメル質表面の pH 測定システムは、酸蝕歯リスクの評価に有用であると考えられた。また、AIW は脱灰初期のエナメル質に対して再石灰化を促進する効果があることが示唆された。この再石灰化促進効果の要因としては、同水がアルカリ性 (pH 10) であること、また製造上の特性から比較的多くの陽イオンを含んでいることなどが考えられる。今後、AIW による再石灰化作用の機序について、詳細に検討する予定である。

4. 結論

1) 口腔内用 pH アンチモン電極を用いた連続 pH 測定システムを用いて、エナメル質表面の pH を測定することができた。2) 安静時のエナメル質表面の pH は 5.9 (中央値) であり、唾液の 6.9 よりも低値であった。3) 酸性飲料 (スプライト, pH 2.8) を摂取した後のエナメル質 pH は脱灰の臨界 pH 以下まで低下し、その後摂取前の数値に戻った。

4) スプライトはエナメル質を脱灰することが明らかになった。

5) AIW はスプライトで脱灰されたエナメル質の再石灰化を促進する可能性が示された。

新聞記事から読む「アイビーファッション」の社会的受容について

—テキストマイニングを通じて—

About the social reception of "ivy fashion" to read from a newspaper article

—Using text mining—

松ヶ瀬 美歩

Miho Matsugase

大妻女子大学大学院 人間文化研究科 人間生活科学専攻 生活環境学専修

キーワード：アイビーファッション，新聞記事，テキストマイニング

Key words : Ivy fashion, Newspaper article, Text mining

1. 目的

本研究の目的は、新聞記事を用いて、日本における「アイビーファッション」(以下、「アイビー」)の社会的受容について明らかにすることである。

2. 研究方法

本研究の対象は、国内主要 4 紙である朝日新聞、毎日新聞、読売新聞、日本経済新聞に掲載された記事とした。データベースはそれぞれ『聞蔵Ⅱビジュアル Digital News Archives for Libraries』、『毎索』、『ヨミダス歴史館』、『日経テレコン 21』である。新聞記事の検索方法は、キーワード検索で、「アイビー」と「ファッション」を AND 検索した。また、分析期間は 1960 年～2017 年とした。

本研究は、テキストマイニングを用いて解析した。その際、立命館大学の樋口耕一が開発し、内容分析の考え方を生かした、フリー・ソフトウェアの KH Coder を使用した。

3. 新聞記事事件数の推移

「アイビー」に関する年代別の新聞記事は、1960 年代 13 件、1970 年代 6 件、1980 年代 35 件、1990 年代 90 件、2000 年代 143 件、2010 年代 91 件であった。1960 年代を基準とすると、1970 年代に一度減少し、1980 年代以降増加していた。一方、「ファッション」のみの検索では、1970 年代の減少は見られず、1960 年代以降増加し続けていた。[図 1]

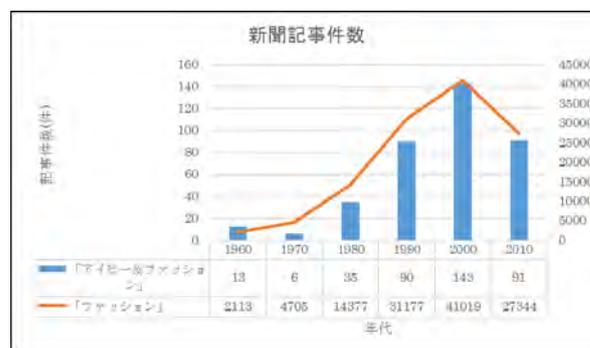


図 1. 新聞記事事件数の推移

また、1970 年代の減少は、「ヒッピー」や「トラッド」という他のファッション領域の記事においても見ることができず、同時に調査した雑誌記事においても、同様の結果が得られた。したがって、「アイビー」に限ったものであると推測することができた。

なお、2010 年代は、分析期間を 2017 年までとしており、ここでの深い考察は避けた。

4. 年代別新聞記事に現れる語

新聞記事に現れる語について、「アイビー」の関連語、特徴語、クラスターという 3 つの視点で、年代別に分析を行った。

分析方法は、KH Coder のコマンドの、語と語の結びつきを探る「共起ネットワーク」、テキスト部分ごとの特徴を探る「関連語検索」と「対応分析」、内容が似た文書の群を探す「クラスター分析」で関連語や特徴語を発見し、その後「KWIC コンコ

ーダンス」や「文書検索」で語の用いられ方を確認した。

「対応分析」では、年代別の特徴強さを調査した。「対応分析」は、各年代のプロットされる位置が原点から遠いほど特徴が強いとされる。その結果、1960年代、1970年代の順で離れており、特徴が強い年代だと分かった。1980年代と1990年代と2010年代は、原点かつ各年代の距離も近く、特徴の弱い年代である。2000年代は、原点からは離れていないが、先の3つの年代からは距離を置き、特徴の強さは中程度と考えた。[図2]

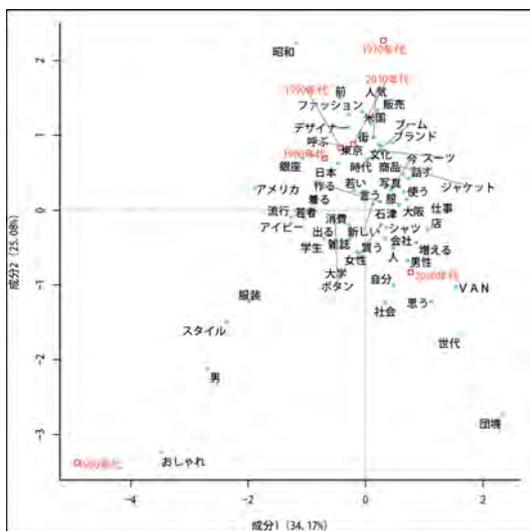


図2. 「対応分析」

同時に、年代別の分析と考察を進めた。

1960年代は、着用の対象とする世代が定まっていなかった。1960年代は、他の年代では殆ど見ることができなかった「背広」に関する語が、強い関連をもつ語とされた。「背広」を着用する世代は、おおよそ社会人である。一方で、「高校生」をはじめとした若者を表す語も多く見られた。また、若者による「アイビー」については、批判的視線も向けられていたことが分かった。

1970年代は、「アイビー」を日本に紹介した株式会社ヴァンジャケットが倒産したこともあり、会社経営に関する語が多く見られた。ただし、「アイビー」のファッションそのものに関する語は殆ど見られなくなり、「アイビー」そのものへの注目は低くなっていたと推測できた。

1980年代は、「トラッド」や「プレッピー」、「スポーツ」というファッション領域に関する語が見

られた。また、「復活」を意味する語も見ることができた。このことから、1980年代は、「アイビー」が、先に挙げたファッション領域に形を変え、流行していたことが分かった。

1990年代は、銀座の松屋で開催された『永遠のIVY展』に関する語が多く、この展覧会を中心に、「アイビー」をはじめとした戦後のファッションや生活文化を振り返る機運が高まっていた。

2000年代は、「団塊世代」という語が強い関連をもつとされた。また、2000年代において、この世代が「退職」時期の前後であったこと、1960年代では、若者にあたる世代であったことが明らかとなった。また、戦後文化の洗礼を受けているとして、市場として注目が向けられていることも分かった。

2010年代は、「日本」と「米国」という語が、繋がりをもっていた。「日本」が「米国」から輸入した「アイビー」が、欧米から注目を向けられはじめていたためである。

5. 結論

「アイビー」の社会的受容は、1980年代に進んだものと推測することができた。その理由には、「対応分析」ではじめて原点付近にプロットされたこと、「アイビー」の代替ファッションの流行が見られたことがある。また、1990年代には、おおよそ受容が終了していたと言えた。「対応分析」で殆ど位置を変えないこと、過去を振り返る記事が増えたことが理由である。その後、2000年代において、「団塊世代」という要素が強くなるが、2010年代には収まり、再び1980年代や1990年代のような記事内容に戻っていった。以上のことから、現在広く認知されている「アイビー」は、1980年代に広まり、1990年代に定着したと言えた。

付記

本研究は、大妻女子大学人間生活文化研究所平成30年度大学院生助成(B)(課題番号DB3026)を得て行われた。

主要参考文献

[1] 樋口耕一: 社会調査のための計量テキスト分析 内容分析の継承と発展を目指して, ナカニシヤ出版, 2014

幼児の造形活動における技術習得プロセスについての検討

An examination of the process of obtaining skills in young children's art-making

大屋 理香

Rika Oya

大妻女子大学大学院 人間文化研究科 人間生活科学専攻 児童発達臨床学専修

キーワード：保育，幼児，造形，表現，技術

Key words : Childcare, Young children, Art-making, Expression, Skill

1. 問題の所在

幼児が絵を描いたりものを製作したりするといった何かを形に表そうとする活動は、通常、保育の分野では、“造形”活動と呼ばれ、表現活動の一部として捉えられているが、ものに直接働きかけ、新たな形を作っていくという点では、他の音楽表現や身体表現とは異なる活動でもある。本研究では、表現という視点からの造形活動だけではなく、より広い意味でのものづくりの原点でもある「造形」の活動として捉えることにし、素材と道具の関わりに着目しながら、造形技術習得プロセスについて検討した。

2. 目的

本研究の目的は幼児がどのように造形技術を習得していくのか、そのプロセスを分析し明らかにすることである。その結果を踏まえて、造形活動における技術の習得プロセスと子どもの表現の広がりとの関わりについて考察をした。

3. 方法

埼玉県にある F 保育園にて約 1 年間予備調査も含めフィールドワークを行い、自由遊びの時間に造形コーナーで幼児が自発的に製作を行う場面をビデオに録画した。本研究の調査に際して協力園である F 保育園の承諾を得た上、観察中のビデオ撮影については個人情報に留意したデータ化など倫理的側面について十分な配慮をした。

林 (1978) は、造形活動の原理を、のりを中心とした接着するプラスの造形とはさみを中心とした切ったり、分けたりするマイナスの造形と二つに分けている (林, 1978, p. 6)。本研究においても、その「プラスの造形」と「マイナスの造形」という 2 つの基本的

造形行為ごとにビデオ撮影した観察記録を分節化し、どのような行動なのか静止画像とともに整理し、その分節化された造形行為の中でどのような技術が用いられているのか使われている素材に着目しながら分析をした。

4. 結果と考察

山田 (2002) の指摘のように、「どんな目的で子どもがハサミを使おうとするかを意識して観察する」(山田, 2002, p. 43) ことを心がけたため、通常は見過ごしがちな幼児の自発的なハサミの使い方というものの詳細に観察することができた。このことは接合する技術としての糊の使い方についても同様である。

まず、幼児は多様な素材と関わることで様々な技術習得をしていることが明らかになった。素材の性質によって習得する造形技術は異なることはいうまでもない。たとえば、色紙、ストローで<1回切り>は習得しやすく、クッションシート、ビニール袋で<滑らし切り>は習得しやすい、薄紙、紙コップで<穴空け>を習得するなどである。ビデオ記録を見ると、造形行為に 30 分以上集中している事例が半数以上あり、その間の会話はほとんど見られず、このことから、幼児は素材と対話することにより新たな技術習得をしているとも言える。

本研究においては、指導をせずに個人の造形技術の習得プロセスを見てきた結果、多様な素材と関わることで幼児は素材と向き合い技術を習得し、その技術習得プロセスには 7 つのタイプがあることが明らかになった。まず、①ひとつの素材に興味を持ち切断、接合行為を繰り返し探索的に技術習得をするタイプ、②ひとつの素材に興味を持ち切断、接合行為のひとつの技術を繰り返し行い技術習得をするタイプ、③様々な

素材を見たり、いじったりするうちに技術を試し習得をするタイプ、④様々な素材を見たり、いじったりするうちにアイデアが思いつき、いつの間にか技術習得をするタイプ、⑤初めからイメージを持ち製作目的があり、多様な素材を切断、接合行為を経て技術習得をするタイプ、⑥他児を模倣する中で技術習得するタイプ、⑦他者、保育者に教わることで技術習得をするタイプである。

また、本研究のビデオ記録を見ると、3歳児でもハサミを器用に使いこなし丸く切る子、4歳児でハートの形を切り抜く子もいた。反対に5歳児でまっすぐ切るのは苦戦している幼児がいた。これは年齢の違いからではなく、同年齢でも差があり、異年齢でも変わらない技術習得段階の幼児がいるということである。造形技術の習得には発達の年齢よりも、ハサミ、糊の道具を使用する経験、頻度が顕著に影響していることが考えられる。つまり、どの保育現場においても、必ずしも全員が高度な技術習得プロセスを一律に歩むわけではないと考えるのが一般的であろう。その進度や至るプロセスは十人十色であり、指導の一般化は難しいと言える。そこで、技術指導を保育者がするかしないかという二者択一の問題としてではなく、ある幼児には自由な素材環境を整え、また別のタイプの幼児には基礎的技術の指導をするといった、幼児一人一人の性格に応じた対応が必要となる。

5. 本研究の意義

本研究は、幼児にとって多様な素材と触れ合うことは造形技術習得を促し、その習得した造形技術が表現力や創造性を豊かにすることにつながることを示唆したと言える。保育の場においては幼児ひとりひとりの表現の大切さを強調されても、それを支える造形技術の習得についてはあまり関心が払われてこなかった。本研究の結果は、幼児の造形技術の習得においては多様な素材との関わりというものがきわめて重要であることを示唆し、保育者が幼児の造形と関わる上での必要な視座を提供することができたと考える。

6. 本研究の限界と課題

本研究では、造形コーナーに自主的に集まってくる幼児たちが分析対象となっている。従って、製作することを好む意欲的な幼児のみに焦点があたり、製作を好まない幼児や造形コーナーに行きたいが一步を踏

み出せない幼児に対しては考慮していない点は、本研究の限界のひとつである。

また、今回は多様な素材を造形コーナーに用意したが、多くがハサミで切ることができ、糊で接着可能な紙質のものに限られていたということである。次回からは、木材やプラスチックなどの素材を用意して、幼児たちはハサミと糊以外の道具を用いる必要のある素材にどう向き合うのかということも見ていきたい。

本研究は基本的には造形教育の視点に立ちながら、幼児の造形技術の習得プロセスを検討した。幼児の造形技術に関する研究が限られている。その理由には、造形—製作—行為というものが自己表現の延長上のもので捉えられてきたために、<技術>そのものにはあまり関心が払われてこなかったことがある。本来、造形は内面的な自己表現だけを強調するものではなく、様々な生活に根ざしたものづくりを含むものであり、創作的表現活動を示す芸術 (art) という語の語源も技術一般を示すものであった (金田, 1991, p.94, 石津, 2018, p.18)。本研究結果からも、幼児の造形にとって技術的な側面が重要であることは言うまでもないことである。

本研究を通して、幼児の造形活動を従来の表現の領域としてだけではなく、造形教育と技術教育を包含させた新たな視点から捉えないと、幼児の内面的な自己表現という枠の中に留まり、幼児自らが技術を習得する力とその力を創造的に発展させる可能性というものを見逃してしまうということが明らかになった。造形を通して幼児の創造性を育てていくためには、造形を表現のひとつとして見るだけではなく、造形本来のものづくりとしての技術的側面を含めた新たな理念的枠組みの中で検討していくことが必要であり、その検討を今後の課題としたい。

主要参考文献・引用文献

- [1] 金田卓也 (1991) 美術教育における比較文化的研究 立教女学院短期大学紀要 23, 93-102.
- [2] 佐川早季子 (2018) 他者との相互作用を通じた幼児の造形表現プロセスの検討, 風間書房.
- [3] 林建造 (1978) 幼児とのり, 幼児の教育 (日本幼稚園協会), 77(6), pp.6-7.
- [4] 石津珠子 (2018) 芸術教育論における美的教育について 東洋英和大学院紀要 14, pp.17-25.
- [5] 山田りよ子 (2002) 幼稚園における遊びの分析—ハサミの使用場面から—, 藤女子大学紀要, 40(2), pp.39-44.

実習指導における保育者の働きかけに関する研究

～A保育所での学生の変容過程に着目して～

A study on nursery teachers' involvement in nursery practical training: Focusing on the transformative process of a student teacher at "A" nursery school

重枝 彩

Aya Shigeeda

大妻女子大学大学院 人間文化研究科 人間科学専攻 児童臨床学専修

キーワード：保育, 実習指導, 保育者, 保育所, 実習生

Key words : Nursery, Nursery practical training, Nursery teachers, Nursery school, Student teacher

I. はじめに

2017年に保育所保育指針改定されたことに伴い、「保育実習実施基準」が一部改正された。

この改正によって、指定保育士養成施設と実習施設との間で、保育実習計画の内容を共有することが明文化された。また、各実習施設においては、「主任保育士またはこれに準ずる者」を「実習指導者」と定めることと共に、この「実習指導者」は当該実習施設内の他の保育士等とも緊密に連携することについても明文化された。

こうした改正は、いずれも実習の重要性がこれまでにも増して認識されていることを意味するとともに、その実習の質の向上を志向するものとして捉えられよう。実際、保育実習は保育士養成課程においてその中核をなすものとして捉えられている（一般社団法人全国保育士養成協議会, 2018）が、では、その研究はどのように実施されてきたのか。

これまでの研究を整理し、検討した結果、実習施設における「実習指導者」の事中共導における指導の効果を明らかにすることを目的とした研究があり、保育実習において、学生が「実習指導者」からの影響を大きく受けていることについての指摘の存在が明らかになっている（田爪宏二, 2011・小島千恵子, 2012）。

ただ、保育実習の事中共導について、その指導の具体的なあり方、つまり、各実習施設において「実習指導者」はどのように実習生に働きかけをしているのかについて検討した研究は管見する限り見当たらないことも明らかになった。

既述したように、今後「保育実習計画の内容」を「指定保育士養成施設と実習施設との間で共有する」ためにも、また、実習施設において「実習指導者」を定めることで、実習指導の質の向上を志向する上でも、まずは「実習指導者」の指導の実態を明らかにしておく必要がある。

そこで本研究では、実習施設における「実習指導者」（以下、保育者と記載）は、学生にどのような働きかけをしているのかを明らかにすることを目的とする。

II. 方法

本研究では、2週間の実習期間中、実習生が配属された2歳児クラス及び3歳児クラスの保育者2名との間で、実習期間中の基本的毎日、保育後に実施された保育者と実習生による「振り返り会」に着目し、その会話内容をデータとして全て収集している。次に、収集したデータの詳細な逐語録を作成し、その逐語録から保育者と実習生による会話内容である「話題」を抽出し、一つずつの「話題」の内容をカテゴリーにまとめた。その上で、各「話題」における保育者の実習生に対する指導である「働きかけ」に着目しその概念生成を行った。最後に、そうして生成された「働きかけ」概念の特徴ならびに2名の保育者のそれぞれの特徴について検討を実施している。

III. 結果

保育者と実習生が「振り返り会」で、話していた会話の内容である「話題」を抽出し、その話題の内容別に整理すると、14の話題カテゴリーに分類で

きることが明らかになった。次に、振り返り会において、保育者が行なっていた働きかけから 66 の働きかけの概念が生成され、それらの働きかけの概念を 5 の大カテゴリー、17 のカテゴリーに分類できることが明らかになった。

(A) 子ども理解を促す働きかけ
(a) 1つの事例を完成させる働きかけ
(b) 事実を加える働きかけ
(c) 事実を焦点化する働きかけ
(d) 解釈を促す働きかけ
(e) 実習生が子どもについて理解をする際の視点を加える働きかけ
(B) 保育所保育について理解を促す働きかけ
(f) クラスの活動内容について伝える働きかけ
(g) クラスの環境構成を伝える働きかけ
(h) 部分実習を支える働きかけ
(i) 保育所の役割を伝える働きかけ
(j) 保育士の役割を伝える働きかけ
(C) ある状況を仮定した際の子どもの関わり方を伝える働きかけ
(k) ある状況を仮定して伝える働きかけ
(l) 子どもへの関わり方を伝える働きかけ
(D) 実習生の学びを先輩保育者として支える働きかけ
(m) 実習生の現状を確認する働きかけ
(n) 実習生の現状を伝える働きかけ
(o) 指導者としての思いを伝える働きかけ
(p) 先輩として伝えたい事柄を伝える働きかけ
(E) 事務的なことを伝える働きかけ
(q) 事務的なことを伝える働きかけ

表 1. 振り返り会における「働きかけ」

そして、本研究における保育者の指導においては、実習 1 週目の保育者も実習 2 週目の保育者も共通して、最も多く用いていた大カテゴリーは、大カテゴリー《A》「子ども理解を促す働きかけ」であった。しかし、それぞれの保育者が振り返り会において用いていた全ての働きかけに対して、大カテゴリー《A》「子ども理解を促す働きかけ」の割合に着目すると、1 週目の保育者は、全体の働きかけの約 5 割が大カテゴリー《A》「子ども理解を促す働きかけ」であり、2 週目の保育者は、全体の働きかけの約 8 割が大カテゴリー《A》「子ども理解を促す働きかけ」であり、その割合には、違いが見受けられた。また、他の大カテゴリーについて見てみると 1 週目の保育者は、それぞれの大カテゴリーについて、1 割から 2 割程度の働きかけを満遍なく用いているのに対して、2 週目の保育者は、他のカテゴリーに関しては、あまり働きかけを行っていないことがわかった。つまり、本研究において調査の対象とした保育実習では、その保育者によって、働きかける内容としてある一定の事柄に重きが置かれた上で、実習における指導がなされるのか、または、様々な内容について網羅的に指導がなされるのかについては異なるということがわかった。

IV. 考察

保育実習における実習指導者の働きかけは、個々の指導者によって異なっていることが明らかになった。つまり、「はじめに」で述べた「保育実習計画の内容」を「指定保育士養成施設と実習施設との間で共有する」という事柄についても、実習

施設において「実習指導者」を定めることで、実習指導の質の向上を志向するという事柄についても、現状としては、極めて曖昧になっているということが捉えられる。言い換えると、「指定保育士養成施設の指定及び運営の基準について」の各教科目の教授内容の標準的事項には、「保育実習」における目標や内容が記載されているが、そのことだけでは、実際にこのような違いが起り得るということである。

もちろん保育者の個性や多様性の存在は、当然認められるべきであろう。ただ、そうした違いや多様性は、どこまで許容されるのだろうか。

このことについて、まずは、個々の保育者が、実習生に何をどのように指導することを、実習において求めることなのか明確に意識する必要がある。と同時に、各養成校が、「指定保育士養成施設の指定及び運営の基準について」の各教科目の教授内容の標準的事項に示されている事柄の中のどの部分を重要視する必要があると考えているのか、またはないのか、あるいは、そのことについて実習施設においてどのように指導を行なってもらう必要があると考えているのか、そうした点について具体的に明らかにする必要があるだろう。その上で、保育現場において実習生の学びとして求めるもの、保育者養成校において学生の学びとして求めるもの、それらをすり合わせた上で、保育実習というものを構想し、実施することによって、実習における学生の学びの質を向上させることに繋がるのではないだろうか。以上のことを踏まえて保育実習における指導のあり方を今後、より詳細に考えていく必要があると考える。

V. 今後の課題

① 本研究で明らかになった働きかけの概念やその特徴を踏まえて、一つ一つのデータに着目し詳細な分析を質的に行うこと。② 保育者の働きかけに対して実習生はどのように変容をしていたのかについて、より詳細に明らかにすること。③ 保育実習の期間の全体を通して保育者の働きかけの変容を明らかにすること。

主要参考文献

- [1] 厚生労働省(2018)『指定保育士養成施設の指定及び運営の基準について』
[2] 一般社団法人全国保育士養成協議会編(2018)『保育実習指導のミニマムスタンダード Ver.2 : 協働する保育士養成』中央法規出版。

『源氏物語』の尼生活

Nun life of The Tale of Genji

上田 ひかり

Hikari Ueda

大妻女子大学大学院 人間文化研究科 言語文化学専攻 日本文学専修

キーワード：女性，出家，家尼

Key words：Women, Priest, Leama

1. 目的

『源氏物語』には15人の尼が登場する。当時の彼女たちは、寺院ではなく、それぞれの家にいる「家尼」であった。この語は『小右記』治安三年閏九月一九日条に「前帥室去夕依病出家，家尼」と一例のみある。しかし「家尼」という存在は広く一般化していたと思われる。「家尼」という形になったのは、国分尼寺の衰退によっている。

「家尼」の生活形態については、その様子を詳しく触れた史料は少ない。また、先行研究でも、出家の背景などについては論じられているものの、その尼生活については十分に考察されているとはいえない。

そこで、本研究では『源氏物語』における「家尼」の暮らし方を明らかにし、物語における存在意義や役割を考察していく。なお、横川僧都母尼・妹尼を「家尼」と規定してよいかは、別途考えることにする。

2. 方法

『源氏物語』内で語られている、女性の出家や尼の暮らしの様子を、養育者としての場合・皇族の場合・宇治十帖の場合・その他の場合の4つに分けて考察した。

3. 結果と考察

<第一章 養育者としての場合>

養育者としての場合は、紫君の祖母尼君・明石尼君・大宮の3人である。

紫君の祖母尼君は、仏道修行の傍らで紫君を世話し、後ろ盾のない彼女の将来を嘆いていた。しかし、臨終の前には、自身が来世で救われるため

にも、紫君を、成長したら源氏に託しても良いと考えた。このことから、尼と養育者の二つの立場で俗世と関わり暮らしていたといえる。

明石尼君は、明石君や明石姫君の将来を心配し、明石の地から京の俗世へと戻り、一族の繁栄を願った。

大宮は、孫の夕霧・雲居雁を気にかけて、二人の仲を取り持っていた。また、玉鬘のことで関係の良くなかった源氏と内大臣との仲裁も行った。玉鬘に対しては、裳着の日に、祖母として祝いの手紙や調度品を贈った。これらのことから、尼でありながらも一族を見守る立場として暮らしていたといえる。

<第二章 皇族の場合>

皇族の場合は、藤壺・六条御息所・女三宮の3人である。

藤壺は、桐壺院の供養を理由として出家した。出家後は、源氏との密通の罪を償う他に、冷泉帝の将来が安泰したものとなるよう、本格的な仏道修行をしていた。また、源氏と囚って梅壺女御を入内させ、冷泉帝の後宮争いが関わる絵合にも力を入れていた。このことから、出家しても母親として我が子を守る姿勢を見せた。

六条御息所は、死を意識し、伊勢の神域にいたことから生じた、仏に対する罪を償うためにも出家した。出家後は、残される娘のことを思って源氏に託した。

女三宮は、柏木との密通の罪に恐れをなし、男女関係から逃れるために出家した。出家後は、持仏開眼供養によって出家者としての道を本格的に歩むことになった。また、仏道修行をすることで、

源氏から遠ざかろうともした。

<第三章 宇治十帖の場合>

宇治十帖の場合は、弁尼・横川僧都母尼・妹尼・浮舟の4人である。

弁尼は、出家前は薫と大君の仲を取り持っていた。しかし、大君の死でそれは叶わなかった。出家後は、浮舟との仲立ちを引き受けた。

横川僧都母尼は、息子の僧都の世話をしていた。しかし、高齢のために妹尼へと引き継がれたと見られる。一方で妹尼は、娘の死を受けて出家し、このことは尼生活とも深く関わっていた。仏の導きとして、倒れていた浮舟を引き取った後は甲斐甲斐しく世話し、また、中将との結婚の仲立ちを行った。そして、薫が行った浮舟の法要の際には、偶然の依頼を引き受けて法衣を整えていた。これらのことから、彼女たちは、僧都の世話を主として行っていたけれども、浮舟の存在によって「家尼」のような立場にもなっていた。

浮舟は、薫と匂宮との板挟みから入水するも助けられ、自身の境遇を回顧する中で、男女関係から逃れようと出家を強く望んだ。出家後は、ただひたすら救われるために、法華経などの経典を多く読むといった仏道修行に励んでいた。また、手習をすることによって過去への清算を行った。彼女の尼生活は、彼岸を目指すために、横川僧都から薫との結婚を勧められても、決して応じないという強い意志の基に成り立っていた。

<第四章 その他の場合>

この章においては、用例が少ない空蟬・女五宮・源典侍・朧月夜君・朝顔齋院の5人を見ていった。

空蟬は、夫の死後、継子である河内守からの懸想を避けて出家した。出家後は、源氏の庇護の下で安定した尼生活を送ることになっていた。

女五宮・源典侍は老齢による出家と見られ、時々の源氏の来訪を、尼生活を過ごす上での慰めとしていた。

朧月夜君は、朱雀院の出家を受け、自身も同じ道を歩んだ。一方で朝顔齋院は、六条御息所と同様に、仏への罪の意識から出家したと見てよい。

4. まとめと今後の課題

以上『源氏物語』における尼生活を見ていった。養育者としての場合は、家族と縁を切らないこ

とによって俗世と関わりながら暮らしていた。

皇族の場合、藤壺は、桐壺院菩提を主としており、これは、皇妃としての典型的な例であった。しかし、実際は、冷泉帝のことなど様々な思いを抱いて暮らしていた。六条御息所は、神域にいたことから、仏への罪の意識を抱いており、このことは、朝顔齋院と共通していた。

宇治十帖の場合は、俗世を離れたいと願う浮舟を、彼岸へ到達できるか否かを課題としていた。

その他の場合は、来世を念じて出家することを目的としている者がほとんどであった。

今後の研究課題としては史実における「家尼」たちの様子や、信仰の質なども検討していきたい。

付記

本研究は、大妻女子大学人間生活文化研究所の研究助成(DB3002:「平安文学における尼生活」)を受けて行われたものである。

主要参考文献

- [1] 西口順子『女の力—古代の女性と仏教—』(平凡社, 1987. 8)
- [2] 勝浦令子『女の信心—妻が出家した時代—』(平凡社, 1995. 5)
- [3] 光華女子大学・光華女子短期大学真宗文化研究所編『日本史の中の女性と仏教』(法蔵館, 1999. 11)
- [4] 三橋正『平安時代の信仰と宗教儀礼』(続群書類従完成会, 2000. 3)
- [5] 曾根正人『古代仏教界と王朝社会』(吉川弘文館, 2000. 9)
- [6] 勝浦令子『古代・中世の女性と仏教』(山川出版社, 2003. 3)

「人間、失格」者の〈語り〉をめぐって

——太宰治「人間失格」を中心に——

坂上 幸

大妻女子大学大学院 人間文化研究科 言語文化学専攻 日本文学専修

キーワード：構造分析、「人間」、直筆草稿、戦後

一、「人間失格」の受容状況と問題提起

太宰治の「人間失格」は、一九四八年六月号から八月号の雑誌『展望』に連載された。その連載途中に、作者太宰治は玉川上水で入水自殺した。スキヤンダラスに入水事件が報道される中で、初出連載当時には作者太宰治の〈遺書〉として受容された。その後の先行研究も作家論的見方が主流となっている。

現代の読者が手に取る文庫版では、表紙カバーの〈リパッケージ〉に伴って新たな読みが誘発されている。新潮文庫版では読者自身の心情と重ね合わせる読み、集英社文庫版では〈文学〉になじみのない漫画『デスノート』の読者が太宰の自殺理由を詮索する読み、角川文庫版ではアニメ「文豪ストレイドッグス」のキャラクター「太宰治」と結びつける読みが生成されていた。これらの読みは、従来の生身の作者の実生活と重ね合わせる読みの延長線上で展開されている。

だが、小説内部に太宰治は登場しない。作者太宰治と重ね合わされやすい受容状況の中で、小説本文における〈語り〉の構造は軽視されていないだろうか。

二、手記内部の構造分析

「人間失格」という小説は大庭葉蔵が語る手記と、「私」が語る「は

しがき」と「あとがき」から構成されている。手記の語り手葉蔵は、「あとがき」で不在の存在として想定されている。語り手葉蔵は、手記の回想形式を利用して自身の半生を語っている。手記末尾の「人間」から「失格」したと自認した地点から、「人間」とは異なる認識の観点を持つ存在として自身を再構成している。「第一の手記」の冒頭で、語り手葉蔵は「人間の生活が見当つかない」と語っていた。これは、手記末尾の「人間」から「失格」したと自認した地点から、「人間」とは異なる認識の観点を持つ存在として自身を再構成していることを示している。この「人間」とは異なる立場から自身と「人間」との相違を語るためには、「人間」に対する鋭い観察眼が必要になる。つまり、回想される葉蔵は「人間」が理解できていないが、その出来事を回想して物語る語り手葉蔵は「人間」について熟知しているのである。不可解な「人間」と関わる中で語り手葉蔵は、他者の心情を考慮することなく発せられる言葉、自主的な意思表示を強要する話し方、言葉による拒否の意思表示を受け入れない態度を批判していた。これら三点が、「人間恐怖」故に自信を持って言葉を発することができない立場を設定した語り手葉蔵が展開している「人間」批判の内実である。

三、「あとがき」の本文生成

手記は葉蔵が執筆してから約十年後の戦後の地点でマダムと「私」に受容された。「あとがき」の中で、戦後の手記の読者である「私」は葉蔵を如何なる存在として捉えているのだろうか。活字本文の「あとがき」の冒頭で「私」は葉蔵を「手記を綴った狂人」と称している。この表現は、執筆メモ、草稿、完成原稿と徐々に変貌していく言語の集積から選ばれたものである。

「人間失格」は活字化される以前の段階の直筆資料が現存している。その執筆メモ、草稿、完成原稿は容易に閲覧可能な状態にある。草稿分析を行うにあたって、これほど充実した資料に恵まれたテキストは珍しい。それにも関わらず、直筆資料を用いた本文の異同に関する先行研究は少ない。「あとがき」部分の直筆資料をたどると、執筆メモの「人間、失格」者こそが「普通の『人間』」であるという批評が失われ、「狂人」とみなす解釈が生成されていた。また、手記読了後に執筆された「はしがき」においても、「私」は葉蔵を「人間」とは異

なる存在として説明している。「私」が葉蔵を「狂人」とみなす態度が、手記内部で批判されていた疑いなく他者に対する評価を発する姿と同等のものであるとするならば、葉蔵の「人間」批判は手記外部の戦後の読者にも向けられている。

四・手記の〈語り〉における戦後性

葉蔵を「狂人」とみなす「私」は、「あとがき」で葉蔵の手記に「現代の人たちが読んでも、かなりの興味を持つに違ひない」と戦後の意義を見いだしている。葉蔵の手記における作者の〈遺書〉としての解釈とは別の戦後性とは何であろうか。

戦後の言説空間では、「人間」という言葉が明確に定義されることなく氾濫していた。だが、戦後の太宰作品においては「人間」という言葉の反乱を特徴づけることはできなかった。しかしながら、この調査を行う中で「人間失格」と同年に発表された「美男子と煙草」に「人間でなくなつてゐる」という言説がみられることを発見した。この両者の表現を比較し、葉蔵の手記にみられる戦後の意義を明らかにした。「美男子と煙草」は、太宰が実際に上野の浮浪者を見に行った体験が語られていて、時代性が色濃く反映されている。このテキストとの構造上の共通点を介して、葉蔵の手記における時代性の一端を指摘することができる。「美男子と煙草」の語り手「私」は、「太宰」という呼称を用いて自身に対する他者からの評価を推測して語っている。その推測とは、自身は「浮浪者」と近似の存在とみなされていまいかということであった。この一方的に自身を「人間」とは異なる存在として設定する言説は葉蔵の手記でも指摘できる。また、「美男子と煙草」のモチーフ分析によって導かれた主張は「人間失格」執筆メモの「人間性を失った者」こそが「人間」であるという批評と重なる。この二点が「人間失格」を持つ戦後の時代性である。だが、執筆メモの「人間性を失った者」こそが「人間」であるという批評はその後の執筆過程で排除され、他者の立場から「人間」が言葉を発する態度を批判する言説が生成されている。これは、「人間失格」の葉蔵の手記における独自性といえる。

五・まとめ

このように、太宰治の実生活と重ね合わせない読みを抽出するため

に、小説本文における〈語り〉の構造に着目して分析を行った。手記の語り手葉蔵は回想形式を利用して、自身を「人間」とは異なる存在として設定していた。この他社の立場から語り手葉蔵は「人間」が言葉を発する態度を批判していた。「あとがき」の語り手「私」は十年後の戦後の地点で手記を読み、「人間」の立場から葉蔵を「狂人」とみなす。その一方で、「私」はこの葉蔵の「人間」批判に戦後の意義を見いだしている。「人間失格」と執筆時期が近い「美男子と煙草」でも一方的に自身を「人間」とは異なる存在として設定する〈語り〉の方法が用いられている。この〈語り〉の方法は両者に共通する戦後性といえる。そして、語り手葉蔵の「人間」が言葉を発する態度に対する批判は「人間失格」の手記が持つ独自の主張である。

主要参考文献

- (一) 滝口明祥『太宰治ブームの系譜』ひつじ書房、二〇一六年六月
- (二) 高田知波『「人間失格」と「葉蔵物語」』（『駒澤國文』一九九四年二月）
- (三) 安藤宏『「人間失格」草稿が明かす創作過程 新発見（特集 太宰治没後50年）』（『新潮』一九九八年七月）
- (四) 松本和也『太宰治「人間失格」を読み直す』水声社、二〇〇九年六月
- (五) 川津誠『太宰治「美男子と煙草」論』（山内祥史編『太宰治研究』和泉書院、二〇〇八年六月）

リーディング・ストラテジーの活性化と長文読解におけるその効果

The activation of reading strategy and its effect on reading comprehension

石原 果奈

Kana Ishihara

大妻女子大学大学院 人間文化研究科 言語文化学専攻 英語文学・英語教育専修

キーワード：英語，長文読解，リーディング・ストラテジー

Key words : English, Reading comprehension, Reading strategy

1. 研究目的

ストーリー・リテリングと長文読解の関連性を研究した際、リテリング課題を与えることによってリーディング・ストラテジー(以下 RS)の使用度は上昇したにもかかわらず長文読解は向上しなかった。このことから、RS と長文読解の間には複雑なメカニズムが存在することがうかがえた。

RS と長文読解についての先行研究では、鈴木・森永(2010)、山下・横山(2004)、足立・大石(2017)など、ストラテジーのレパートリーの広さとその RS 使用度を尋ねる質問紙を用いてストラテジーと長文読解の相関を究明しようとするものが多く、RS 指導の効果に関する研究は不足している。今回の研究では、指導による RS 使用意識の向上とそれによる長文読解の向上を明らかにする。

2. 方法

主に私立大学英文学科・社会情報学部に所属する大学2年生72名を対象とし、実験群36名、統制群36名の2群に分けた。さらに、両群それぞれを読解力上位群と下位群に分けた。実験で用いる長文は、大学センター試験長文問題を使用した。実験で用いる RS は以下の5つである。①「未知語推測」、②「代名詞の理解」、③「接続詞の活用」、④「トピック把握」、⑤「メインアイデア把握」。これらの5つは、先行研究の(卯城・清水; 2007)の一部から引用している。読解問題においては5つのRSに対応した設問となっている。

実験では、まず RS 使用意識を尋ねるための事前アンケート、実験で用いる英単語の知識の有無を確認するための単語確認テスト、20分間で長文を読んで設問に解答する事前テストを行う。その

後、RS 指導を行い、20分間で長文を読んで設問に解答する事後テスト、事前アンケートと同様の事後アンケートを行う。なお、事前・事後テストは、難易度は等しいが異なる長文問題を使用する。

RS 指導としては、指導するストラテジーの説明、例題を用いたストラテジー使用方法の実演、練習問題を用いたストラテジー練習を行う。教材は、”Making Connections①, ②”(Pakenham et.al, 2013; Cambridge 社)を用いる。

3. 結果と考察

RS 指導によるストラテジー使用意識の向上について分散分析を行った結果、実験群下位群の使用意識は高まった(表1)。上位群は以前から RS を使用していた被験者が多く、天井効果によりそれ以上向上しなかったと考えられる。下位群は、指導前のストラテジー使用意識は上位群よりも低かったが、指導後は上位群よりも向上し、下位群にのみ有意差が表れた。

要因	F 値	P 値
指導	F(1, 34)=10.73	p<.002
習熟度	F(1, 34)=.198	p=.659
指導*習熟度	F(1, 34)=4.34	p<.045

表1. 実験群の分散分析結果 (RS 使用意識)

RS 使用意識の向上による長文読解の向上について分散分析を行った結果、RS 指導を行うことによって下位群の長文読解が向上した(表2)。上位群は RS 指導を行う前からストラテジー使用意識が高く、事前テストの得点は下位群に比べ3.78点高かった。したがって、事前・事後テストとの間

に有意差が表れなかったと考えられる。また、事後アンケートは、上位群は既に確立した自分の読み方にRS指導によって与えられた知識が干渉し、指導が長文読解の妨げになってしまった可能性を示唆する。それに対し、下位群は指導前のストラテジー使用意識は上位群に比べて低かったため、指導を通して上位群が指導前から知っていたストラテジー知識を得ることによって上位群との読解テストの得点差を縮めることができた。

要因	F 値	P 値
指導	F(1, 34)=5.83,	p<.021
習熟度	F(1, 34)=33.59	p<.01
指導*習熟度	F(1, 34)=29.22	p<.01

表2. 実験群の分散分析結果（長文読解）

RSと長文読解の因果関係を検討した。ストラテジー使用意識と長文読解の相関は実験群上位群では指導前より強い相関が表れた[r=0.43, r=0.70]。一方で、下位群では、指導前と後の双方において相関はほとんど見られなかったことから[r=-0.11, r=-0.16]、下位群のストラテジー使用意識の向上が長文読解の向上につながったとは言えない。下位群の場合、自己評価する際に自身のストラテジー使用を客観視できないために正当ができない可能性がある。しかし、上位群では、指導前後でストラテジー使用意識と長文読解に中程度と強い相関があった。これは、上位群においては自身を適切に評価することができ、ストラテジー使用の自己評価の信頼性が高いことを示唆している。

さらに、各ストラテジーの事前・事後テストの得点を見ると、ストラテジー「代名詞の理解」と対応した設問の得点が実験群下位群は上昇したのに対し、上位群は下降した。本研究ではストラテジー「代名詞の理解」の指導の際に代名詞が指し示しているものをその前後2, 3文あたりを読んで探すようエリア指定した。これにより、本来、文章全体を把握したうえで文脈を理解し代名詞が何を指すのかを特定するはずである行為が、2, 3文と限定された中から探す行為に変わってしまったことが要因として考えられる。

4. まとめと今後の課題

RSの知識の有無は、長文読解に大きな差を生むことが明らかになった。指導前からストラテジー

を知っていたと事後アンケートで回答していた上位群は、ストラテジー使用意識は変わらず、長文読解は下降した。これは、天井効果と以前より持っていたRSに指導が干渉したことが原因だった。それに対して、事後アンケートで指導前にはRSを知らなかったと回答した下位群は、ストラテジー使用意識が上昇し、長文読解も向上した。つまり、RS指導を行う前からストラテジーを活用し自身の読み方を確立していた上位群よりも、指導前にはストラテジーを知らなかった下位群にRS指導は効果を及ぼした。このことから、長文を読む際の基礎知識としてRS指導を授業で取り上げることは、長文読解力の向上につながると考える。RS指導を体系的かつ継続的に行うことにより、リーディング能力も向上すると考える。

なお、本研究ではRS指導は下位群のみに効果があったが、今回の実験は1回のみ指導結果であるため、知識とその応用の浸透が不十分だった可能性がある。RS指導を継続的に行って長文読解の向上を観察することが今後の課題である。

また、実験群上位群の長文読解が下降した。この大きな要因として、「代名詞の理解」に対応した問題の平均点が下降したことが挙げられた。さらに、平均点が下降した要因としては、「代名詞の理解」の指導の仕方を先に述べた。つまり、ストラテジー指導において誤解を招く教え方をすると長文読解を下げる危険性があることが示唆された。したがって、ストラテジー指導においては学習者の既存の知識にも考慮して、綿密な計画を立てて行う必要がある。

主要参考文献

- [1] 足立望・大石晴美(2017). 「習熟度別英語リーディングストラテジー指導の効果」『学習開発学研究』, 10, 57-63.
- [2] 鈴木・森永(2010). 「読解力とリーディング・ストラテジー活用度との相関性に関する一考察」『常葉学園大学外国語学部研究起用』, (26), 87-102.
- [3] 山下純一・横山吉樹(2004). 「第二言語学習者が用いるリーディングストラテジーの発達についての考察」, 『HELES JOURNAL』, 4, 65-82
- [4] Ushiro, Yuji & Shimizu Yuko. (2007). Reading Activator, Tokyo: McGraw-Hill Education

Changes in students' intrinsic and extrinsic motivation in English learning: A mixed methods research study

芝 すみれ
Sumire Shiba

大妻女子大学大学院 人間文化研究科 言語文化学専攻 英語文学・英語教育専修
Key words : English education, Motivation, Meaningfulness

1. Purpose

This study surveyed a case of changes on Japanese women's university students' motivation by comparing their 3rd year in high school and after entering university. Possible causes and elements included in intrinsic and extrinsic motivation were analyzed in the quantitative and qualitative data collection. The main research questions of this study: 1) How has students' motivation been changed between the two time periods? 2) Does job-hunting influence students' motivation as much as university entrance exams? According to Brown (2014), in mixed methods research (MMR), both quantitative and qualitative results should be analyzed to discover a third new aspect leading to answers for these above research questions.

2. Background literature

The theoretical background studies of this study were Hiromori (2013) who provided practical advice about various word forms of "motive" into schools and teachers, and Kikuchi and Sakai (2016) who found potential that certain causes could be both motivator and demotivator for students. Taguchi's (2013) study about Japanese tendency of pursuing personally agreeable self rather than professionally successful self was used as a methodological background study.

3. Methodology

For the quantitative method, a questionnaire was conducted with 131 Japanese female university students in a department of English language and literature at a women's private university in Tokyo.

As the qualitative method, interviews were employed. Five students were recruited from the pool of 131 participants. Pseudonyms were used to protect the interviewees' privacy. Nine interview questions were asked. Those were asked in the interview in Japanese and recorded with the voice memo in my iPhone. The recorded interviews were transcribed according to symbols from Jefferson (2004).

4. Results

The questionnaire illustrated how the English major participants' motivation was changed, with statistical analysis as shown through two-way repeated ANOVA (analysis of variance) and t-test with Bonferroni correction. The interviews that followed the qualitative survey noted how influential each element and cause were in the students' learning experience. Regarding the first research question, the two-way repeated ANOVA analysis indicated that both intrinsic and extrinsic motivation showed increase in statistical significances (See Table 1). The interaction between each type of motivation and the type of time periods was slightly significant.

Factor	<i>f</i> value	<i>p</i> value
Time periods	$f(1,130)$ = 25.848	$p < 0.001$
Types of motivation	$f(1,130)$ = 36.156	$p < 0.001$
Time periods * Types of motivation	$f(1,130)$ = 3.234	$p < 0.074$

Table 1 Results of two-way repeated ANOVA

About the second research question, the t-test with Bonferroni correction examined that university entrance exam and job-hunting increased from the final

year in high school to after entering university significantly (See Table 2). Also, interview analysis found that the job-hunting caused the students to realize what their priorities were to pursue their careers. This realization could lead them to be more goal-oriented that they would focus on a score or certification than enjoying English as the language. Therefore, the job-hunting could have more influence on students' motivation than the university entrance exams.

Types of motivation	Factor	<i>t</i> value	<i>p</i> value
Intrinsic Motivation	(d) Music or Movies	<i>t</i> (130) = -5.43	<i>p</i> < 0.001*
	(e) Communication	<i>t</i> (130) = -5.40	<i>p</i> < 0.001*
	(h) Desire	<i>t</i> (130) = -4.90	<i>p</i> < 0.001*
Extrinsic Motivation	(b) Overseas	<i>t</i> (130) = -4.62	<i>p</i> < 0.001*
	(g) University entrance exam / Job-hunting	<i>t</i> (130) = -.5.37	<i>p</i> < 0.001*

Table 2 Results of t-test as post hoc comparison for 5 elements as possible causes on students' motivation

5. Discussion

Based on primary findings, 3 insights derived from both quantitative and qualitative data analysis were found with mixed methods research characteristics. The insights concern with: 1) a change in students' realization of English learning, 2) a difference between continuously improving English as a main tool and not doing so, and 3) possible recognition of status and grades for learners. The first insight related to students' sense of joy in English learning. It was discussed how a decrease of the sense was occurred. The second one showed influence of job-hunting on students' motivation and their awareness of English. It provided possibility that Japanese may have their personally agreeable self as a base of the professionally successful self. The third discovery revealed their possible feelings regarding their classmates and perceived self through the status and grading. Evaluation and the students' sense of hating to lose to others were discussed to explore actual impacts of those two elements.

This study tried to enhance the "meaningfulness" which according to Brown (2014), indicates if a research result can be generalized and applied into a different group sample, which is from the quantitative side and if a study has a rich transferable information (118-119).

According to Brown's (2014) explanation of MMR, since relevant perspectives were generated from both types of data analysis, this study could enhance its meaningfulness by having further arguments about students' sense of joy in their English learning, featured changes in their motivation and honest feelings relating to evaluations and relationship with classmates.

6. Conclusion

This study contributed to gaining richer insight of change on students' motivation in the department. Also, the actual impact of the section system was revealed by the interview analysis and it could generate suggestions to facilitate a warmer classroom environment for increasing intrinsic and extrinsic motivation more effectively. Based on this study, future studies can explore more accurate features in motivation identified in this study employing a variety of samples including not only English majors but also other majors.

Works Cited

- Brown, James D. *Mixed Methods Research for TESOL*. Edinburgh, UK: Edinburgh University Press. 2014.
- Hinomori, Tomohito. "Motivational Design for Effective Second Language Instruction." *Motivation, Attitudes and Selves in the Japanese Context*, 2013, pp. 291-308.
- Jefferson, Gail. "Glossary of Transcript Symbols with an Introduction." *Conversation Analysis: Studies from the First Generation*, 2004, pp. 13-31.
- Kikuchi, Keita, and Hideki Sakai. "Factors on Changes of English Learning Motivation: A Content Analysis of Motivating and Demotivating Experiences". *JALT Journal*, vol.38, no.2, November 2016, pp. 119-147.
- Taguchi, Tatsuya. "Language Learning Motivation in Japan." *Motivation, Attitudes and Selves in the Japanese Context*, 2013, pp. 169-188.

新たな日中関係の構築について

About construction of new Japan-China relations

高尾 和泉

Izumi Takao

大妻女子大学大学院 人間文化研究科 言語文化学専攻 国際文化専修

キーワード：中国，社会，個人

Key words : China, Society, Private person

1. 目的

1972年から80年代初頭にかけて、日中友好の黄金期と呼ばれる関係が築かれていた時代から、現代に至るまでの関係悪化の変遷をたどる。これまでの日中関係の改善策の大半は、政治的解決法によったものであった。しかし、“個”が尊重される現代において、国家が“集団”を動かす政治的解決法では、抜本的な解決には至らないと言えるのではないだろうか。

したがって、本稿では、従来とは違う新たな日中関係の構築を目的とし、社会的解決法を提案したい。ここで言う社会的解決法とは、中国における「80後」、「90後」と呼ばれる若い世代が“個”を重視するようになっており、そういった“個”が共生することで、“集団”に流されない社会を構築することである。また、日本においても、中国より早い段階で経済発展を遂げたことから、すでに“集団”から“個”への流れが定着しており、日中は両国とも“個”を尊重し、共生する社会へと転換していると言えよう。

「村」や「実家」といったコミュニティから脱し、「個人」として生活する人々の行動原理は、自らの価値観に基づいている。そのため、国家や既存の社会体制には左右されない“個”と“個”のつながりと相互理解による信頼関係を構築している。協力することで益を共有し、互いを尊重して過剰な交渉はしない、独立した“個”のつながりを国家レベルまで発展させることができれば、新時代に適した安定的な協力関係の構築が可能であろう。

2. 論証

日本と中国は、既に物質的に豊かさを手にして

おり、都市部には「村」や「実家」といったコミュニティから脱し、「個人」として生活する人々が定着している。日本では、高度経済成長期からバブル期にかけて“集団”から“個”への流れが定着していった、そういったなか、自由と豊かさを手にしたはずの人々は、実体のない「孤独感・喪失感」を抱くようになり、それを文学作品で表現した村上春樹『ノルウェイの森』や吉本ばなな『キッチン』は、多くの読者から支持された。

中国においても、改革開放以降に“集団”から“個”への流れが定着しており、同じように「孤独感・喪失感」を抱く人々が、村上春樹作品に魅了された。本稿では、このように文学作品を例に、日本と中国は同じように“集団”から“個”へ移行する社会の転換期を経験し、多様化する価値観のなかで共感できる部分が多いことを示した。そして、こういった“個”の繋がりを強固なものにすることで、社会的側面からのアプローチにより、諸問題を解決することが可能であることを明らかにした。

3. まとめと今後の課題

本稿では、日本と中国の社会が“集団”から“個”へと移行していることに着目し、“個”が自らの価値観に基づき、相手国に対して関心を持つことで、新たな日中関係が構築できると論じてきた。そういった“個”が相手国に対し、興味を持ってもらうためには、インターネットやSNSを利用した、公正で効果的な情報発信の方法を検討する必要がある。また、“個”が判断したうえで、相手国に対

して良くない印象や感情を持ち、その解決を国や政府に望む場合、どういった手段を講じれば、納得のいく解決策を打ち出せるか検討する必要がある。今後はこの2点を課題とし、研究を継続していきたい。

文化としてのネット用語

—若者ネット用語の日中比較—

Network terminology as culture

—Comparison of net terminology between Japanese and Chinese young people—

丁麗新

Lixin Ding

大妻女子大学大学院 人間文化研究科 言語文化学専攻 国際文化専修

キーワード：ネット流行語，影響，文化，社会心理

Key words : Internet catchphrases, Influence, Culture, Social psychology

1. 目的

21世紀に入って、世界経済の急速な発展、科学技術の進歩、インターネットの急速な普及、通信技術の発達とともに、社会には大きな変革が起こった。ネットワークは急速に普及し、ネットユーザーの数は飛躍的に増加した。言語は時代の潮流に伴い、社会の発展と変化を反映している。ネット流行語は新しい言語の形として人々の視野に現れた。ネット流行語はある時期の政治、文化、経済、技術などの産物であり、簡単な言葉の裏にはその時期の現実生活を反映しており、社会の変化を理解し、世論を把握するための鏡である。新世紀に入ってから、インターネットの新しいメディアは新思想、新文化の成長の土台を提供している。人々は言論の自由の権利を追求し、特に現在の社会発展の動力としての若者たちが、一層先鋭に自分意識を強めてきた。若者はネット流行語の使用者として、伝統的な制約を突破したいという志向を持っている。自由、外向、開放的な言語は若者の顕著な特著となっている。世界とネットワークの環境の影響で、ネット流行語が発展し、言語文化の重要な代表となっている。本研究は日中両国のネット流行語の先行研究を基にして、資料を研究することに加えて、日中両国のネット流行語使用者の心理面を分析、比較する。両国の社会心理を研究する研究者たちに多少なりとも意味のある資料を提供することができると思われる。

2. 研究内容と考察

本研究は、先進国としての日本と発展途上国の中国の2013年から2017年までの五年間のネット流行語について分類、分析し、それらの流行語に反映された社会現状、問題及び社会に与えた影響を考察してみた。ネット流行語と社会の関係によって、本研究では、政治、経済、文化、社会という四つの方面に流行語をわけてみる。この四つの方面の流行語をもとに、現代社会の状況と国民の社会心理について考察してみた。

政治の面では、特に2013年から2017年の中に、中国の新しい主席習近平と日本の新しい首相安倍晋三は就任した。中国の政治に対する国民の不信感が増え、「我爸是李刚」、「富二代」、「官二代」などのような官僚腐敗に不満の現状を変えるために、政府は官僚の腐敗問題を最大の力で改めるために、「打虎拍蝇」、「断崖式」などの政治政策が実施された。新たな政策に伴い、国民の生活や国家の経済の成長などに様々な変化があり、成果が生まれてきた。日本の政治に対する、「アベ政治を許さない」という流行語は日本の国民の国家の政治に対する不満を反映している。日本における言論の自由を表すとも考えられる。逆に中国の政治に関連する流行語はおおむね遠回りに政治を皮肉っており、日本のような直接的に政治に不満を表明することは少ない。両国における、流行語を選定す

る機関について、中国では政府が介入することと日本の民間機関主体のあり方は鮮やかな対照があり、国民の言論の自由には差があることと政治の透明度にもまた相違のあることが、理解された。

経済の面では、日本経済の停滞する状態により、安部の経済最優先の政治政策について「アベノミクス」、「ブラック企業」などの言葉が人気を集め、流行語になった。中国はGDPが世界第2位の経済大国を自任している、中国の経済は徐々に発展しているうえ、中国の経済、政治など世界大国を目標として「中国の夢」というスローガンが流行語になった。この流行語が一定の支持を得たことは、中国の国民は中国の経済に自信を持っていることを示している。安倍政治の影響で「アベノミクス」という流行語が生み出されたが、これも一定の支持を得て、安倍首相内閣初期の経済政策が国民に「ウケた」ことを示しているといえる。

文化の面では、日中両国の「男尊女卑」の伝統的な文化の影響で、両国の女性が社会において不平等な待遇を受けていることを示すような流行語がある。社会の現状によって、日本における「ありのまま」と中国の「女漢子」は近年、女性が平等な地位を獲得するために努力していることを反映している。日本、中国とも、社会における男女の関係について男女平等の意識を強く求める傾向がうかがえた。

社会の面では、中国の「单身狗」というネット流行語はいくつの深刻な問題を反映している。一見、独身者と未婚の男女を指し、自嘲する言葉であるが、一段深く考えてみると、深刻な問題を蔵している。「单身狗」の問題は少子化と高齢化の問題と「天価礼金」のような陳腐な伝統習俗の問題とも繋がっている。現実社会は金銭社会であることと「売買婚姻」の問題を皮肉る。特に、男性は現実の不満と陳腐な伝統習俗を廃棄したい気分を表している。

3. まとめと今後の課題

本研究は、2013年から2017年の間のネット流行語が社会の発展とともに変遷し、それが国民の

心理状態を把握するために有効なものであることを示した。ネット流行語の寓意を分析し、各分野の流行語の間での相互関係を考察することが、ネット流行語の研究においては重要なことであると考える。ネット流行語の研究はいわゆる世相、社会生活に対する国民の感じ方について、新しい視点を提供することができると思う。

ネット流行語の研究、特に日中両国のネット流行語の比較研究は、まだ初歩的なものであるが、将来こうした考察をますます深くすることが、日中両国の社会比較研究に有力な視角を提供できると期待するものである。

主要参考文献

- [1] 陈云普『流行语背后的社会心态揭示』『人民论坛』2014年
- [2] 陈旻, 刘少杰『网络流行语的感性化与讽喻性』『人文杂志』2013年
- [3] 李盈颖「网络流行语与网络青年亚文化研究- 给予2008年-2014年<年度十大网络流行语的>的分析」2016年
- [4] 王仕勇『网络流行语研究: 社会与媒介的视角』中国社会科学出版社 2016年
- [5] 堀尾 佳以「中国語における若者言葉-日本語との比較」東アジア日本語教育・日本文化研究 2010年
- [6] 明石順平『アベノミクスによろしく』大日本印刷 2017年

近代日中知識人の東アジア文化観

—岡倉天心と辜鴻銘を例に—

Views of East Asian culture by Japanese and Chinese intellectuals in modern times
—Taking Okakura Tenshin and Ku Hung-ming as representatives—

梁 貝葉

Beiyue Liang

大妻女子大学大学院 人間文化研究科 言語文化学専攻 国際文化専修

キーワード：文化，伝統，衝突

Key words : Culture, Tradition, Conflict

1. 目的

近代、西洋化は東アジア諸国のテーマになった。日中の知識人たちは西洋の知識を学び、西洋の文化や現状を知ることによって、西洋の輝かしい物質文化の背後には混乱と困惑があることも了解した。そこで何人かの知識人は、物質的に遅れているアジアの文化が本当に価値がないのか、世界を制覇したヨーロッパが本当に文化的に優越性を持っているのかどうかと問いかけた。二つの違う文化が衝突した時、その優劣をどのように判断するか。本研究はこうした問いかけに答えるべく、近代日中両国それぞれ西洋諸国に文化の分野で対抗する時の両国の知識人の代表として、辜鴻銘と岡倉天心をとりあげ、彼らの著作から彼らの西洋文明に対するそれぞれの価値評価を分析し、近代東アジア比較文化の新しい視角を得ることを目的とする。

2. 方法

本論文は、岡倉天心と辜鴻銘を日中知識人の代表としてとりあげ、彼らが日中両国と西洋文明の衝突を論ずる著作を分析し、それぞれ、日露戦争時期前後の岡倉天心の『日本の覚醒』と義和団事件前後の辜鴻銘の文章の収録としての『尊王篇』を中心に分析し、二人の経歴に合わせてその観点の相違と彼ら独自の思想形成の原因を比較することを研究方法とする。

3. 結果と考察

この二人の知識人は、アジアの文化を逆向きに西洋に輸出するが、実際彼らの著作を分析すれば、相当に大きな違いが見てとれる。

第一に、彼らの持っている観点が異なる。辜鴻銘は東洋文化、特に儒家文化を褒める一方でより多く西洋への批判や皮肉が多い。岡倉天心は、歴史を解説して東方の文化を解釈することに重心において、批判の部分が少ない。これは、二人の出発点が違うからだろう。辜は西洋で育てられ、小さいころから西洋の文化の害毒を見てきた。彼の出発点は、東洋文化の中から西洋文化の解毒薬を探そうとしている点にある。彼は中国文化を好きになるのは帰国した後のことで、中国文化を守るのは中国文化の中で西洋文化に欠如している価値があるからである。そのために、西洋文化に対して大いに批判を加えたのは、西洋人や欧化に夢中になっている中国人に警鐘を打ち鳴らすためである。岡倉天心は、小さい頃から日本で育って、東西の教育を同時に受け入れた。彼の伝統文化に対する愛は、大学時代の先生フェノロサの影響が強い。そして次第に、この愛は愛国心につながっていく。彼の作品にはその強烈な愛国心が感じられる。祖国が西洋の偏見に直面した時の、焦りと怒りの感情が彼の文字から読み取れる。

第二に、彼らの分析方法は異なる。辜鴻銘は主に東洋文化の理念を西洋人がわかりやすい言い方で解説する。岡倉天心は事実や実物に基づいて東

洋文化を解説する機会が多い。「日本の覚醒」は、歴史に基づき、日本文化の価値観を西洋に示している。彼の他の二冊の本もアジアの歴史とお茶を使って、アジアの文化を説明している。

彼らの創作の出発点と書く方法は違うが、彼らの観点は非常に似ている。この中の原因は二つあると考えられる。まず彼らは正統的な西洋教育を受けて、西洋社会に対して深く全面的な認識を持っている。その次に、彼らが執筆する時期は、失意の人生の境地にあった時である。辜は西洋と東洋の文化を把握してから最後まで、政府に重用されず、終始張之洞の幕下で洋文秘書を務めた。そして、かつての清流党の仲間たちも次第に彼らの主張を変え、西洋化を進めることを選んだ。岡倉天心は伝統的な観念で芸術学校を経営していたが、さまざまな理由で芸術学校の校長を辞めざるを得なくなった。彼らの伝統文化を尊重する訴えは、国内で聞かれなくて外国で評判を呼んだ。それは彼らが英語で著作を書く理由の一つである。このような経験は彼らが更に深く伝統の文化を発掘して、そして全世界に発揚するように促す。

岡倉天心と辜鴻銘は西洋文明について物質的で利欲的であり、精神的追求に欠けていると考えている。東洋文明は一見立ち遅れているが、高尚な精神的追求をしてきた。グローバルリズムが盛んな時代には、伝統文化に対する自信と文化アイデンティティを守ることも重要な意味を持っているのであり、辜鴻銘と岡倉天心は日中両国において、東洋文化の優れた点を西洋知識人に知らしめたという功績において、もっともすぐれていた人物であると評価できる。

4. まとめと今後の課題

岡倉天心と辜鴻銘は東西の文明に対して、物質面と精神面と分けて分析し、東洋文明の独特な価値を世界へ広めた。しかし、国外では高く評価された二人は国内では様々な批判をうけていた。なぜ、西洋に称賛される人は西洋化を進める志士たちに批判されるのだろうか、その背後の歴史的、文化的原因を一層深く考究していきたい。

主要参考文献

- [1]岡倉一雄(2013)『父岡倉天心』岩波書店
- [2]岡倉天心(2014)『日本の覚醒』(夏野広訳)講談社
- [3]ハインツ・ゴルヴィツァー(1999)『黄禍論とは何か』(瀬野文教訳)草思社
- [4]平川祐弘(1989)『西欧の衝撃と日本』講談社
- [5]三石善吉(1996)『中国、一九〇〇年——義和団運動の光芒』中央公論新社
- [6]戴玄之著(2010)《义和团研究》，北京大学出版社
- [7]辜鴻銘著(1987)《辜鴻銘文集》(黄兴涛等译)，海南出版社
- [8]孔庆茂著(2015)《辜鴻銘評傳》，百花洲文艺出版社

医療機関の精神保健福祉士実習における実習評価尺度の開発

～ソーシャルワーカーの価値を伝えるために～

Development of rating scales of the social work practice in mental health in psychiatric social worker
-To convey the sense of values of the social work-

朝倉 由衣

Yui Asakura

大妻女子大学大学院 人間文化研究科 現代社会研究専攻 臨床社会学専修

キーワード：精神保健福祉士, スーパービジョン, 価値, 評価尺度

Key words : Psychiatric social worker, Supervision, Sense of values, Rating scales

1. 目的

2000年の社会福祉基礎構造改革では、良質なサービスを支える人材の養成・確保が掲げられた。具体的には、社会福祉専門職に対しては、保健医療との連携や介護保険制度の実施に対応した教育課程の見直し、実習教育の強化、卒後継続教育の充実である。

それらを背景として本研究では、社会福祉専門職の中でも精神保健福祉士養成課程における、現場実習指導に焦点をあてる。

研究目的は、精神保健福祉士実習指導における、専門職として備えておくべき価値・倫理、知識・理論、技術を可視化し共有することができる、評価尺度を開発することである。実習教育は、実習生(学生)、実習指導者、養成校の実習担当教員(以下教員とする)の三者が協同して行うものである。どれか一つが欠けても成立しないばかりでなく、三者が足並みを揃えなければ、良い学習効果は生まれない。また現場の実習単体で成立するものではなく、実習前・実習中・実習後の連続した学びの中で実習教育は成り立っている。学生は、実習前の段階から、自身の学びの到達度を評価尺度を用いることで客観的に捉えることができ、自己の課題を明確に把握することができる。実習指導者と教員は学生の学びの到達度を知ることにより、指導に活かすことができる。さらに、三者で一つの評価表を共有することで、個々に異なる学生の能力や学習の到達度を共通理解できると考えられる。

2. 方法

精神保健福祉士養成の現場実習指導では、実習生(学生)、実習指導者、教員の三者が共有できる評価尺度を作成し、実習で使用する。

評価尺度の作成にあたっては、近年、高等教育における講義や授業だけではなく薬剤師、看護師、理学療法士などの国家資格者を養成する現場実習の評価でも導入されている、ルーブリック評価を用いた。ルーブリック評価の作成手順は、2010年の精神保健福祉士法改正によって示された、科目区分の「精神保健福祉援助実習」のシラバスの内容を基本に作成した。また、到達目標を達成するためのレベルを4段階で示し、各レベルごとに4段階の到達度を設定した。なお、到達目標すなわち、大項目(ねらい)を達成するためのレベルは、ブルームら(B.S. Bloom)の教育目標分類学及び文部科学省が提示する、2020年度からの「新しい学習指導要領の在り方について」を参考に作成した。レベル1は「個別の知識・技能」とし、実習開始時点で理解している知識を問う内容とした。基礎的・基本的な知識・技能を着実に獲得し、知識・技能の定着を図る。レベル2・3は、「思考力・判断力・表現力等」とし、主に実習初期をレベル2、実習中期をレベル3とした。既存の知識・技能と関連付けたり組み合わせたりし、様々な場面で活用できる知識・技能として体系化しながら身に付けていくことを目指す。具体的には、実習中に、感じたことや観察したことや考えたことを、他者へ説明できる内容としている。最終段階のレベル

4 は「学びに向かう力、人間性等」とし、実習後期を目安に、自己の感情や行動を統制する能力、自らの思考のプロセスを客観的に捉える力など、いわゆる「メタ認知」を踏まえ、実際に実践できるレベルとした。4段階の到達度は、上から順に、「理解しているまたはできる」「ほぼ理解しているまたはほぼできる」「あまり理解していない」「理解していない」とした。

実施方法は、まずルーブリック評価尺度を使用し、実習開始前に実習生（学生）と教員で実習前評価を行う。次に、実習終了後に実習生（学生）と実習指導者で実習事後評価を行う。さらに、実習事後指導終了後、すなわち養成校のすべての講義が終了し、精神保健福祉士国家試験終了後に実習生（学生）・実習指導者・教員の三者で、事後指導終了後評価を行った。最後に、国家資格取得後、卒業後3カ月後に実習生（学生）と実習指導者で卒業後評価を実施した。分析方法は、単一事例実験法を用いて、質的分析を行った。実習前、実習終了後、国家試験終了後、卒業後3カ月後に、実習生（学生）に自己評価を実施してもらい、その結果を持ち込み、実習指導者・教員との二者または三者で評価の根拠を確認し修正した。またその際の会話を録音し内容を逐語録に起こし、分析を行った。

3. 結果

精神保健福祉実習において、ルーブリック評価尺度を導入した有効性として2点が挙げられよう。1点目は、専門的援助技術の習得に向けて、何を見るべきか、観察するべきかが、実習生（学生）に伝わり、行動変容につながった。これは、ルーブリック評価の特徴である課題・達成すべき目標が一目でわかり、かつその到達度を示すことができるといった点が反映されたと考えられる。2点目は、評価尺度を節目、節目で使用したことにより、実習生（学生）に対し目指すべき目標を示すことができ、繰り返し使用することで聞かれている内容の理解につながり、意識させることができたと考えられる。すなわち、実習前の段階から、自身の学びの到達度を評価尺度を用いることで客観的に捉え、自己の課題を明確に把握することにつながったと考えられる。

4. 今後の課題

今後の課題として主に2点が挙げられた。1点目は、評価項目は、どのような表現が適切かまた三者が共通して理解できる語彙や表現をさらに追

求し精査していく必要性である。2点目は、実習生（学生）自身の学びが深まるにつれて、実習生（学生）自身が求めるレベルが上がっていくことわかり、実習生（学生）自身が求める、質の変化があった。求める質の変化を尺度にどのように反映させられるか、今後の検討課題がわかった。

また、今回作成を試みた評価尺度は、医療機関の実習に限定されたものである。精神保健福祉士養成における実習教育は、精神科医療機関と地域の障害福祉サービス事業を行う施設等の2ヶ所で実施されている。それぞれの機関で実習生（学生）は実習を行っているが、実習生（学生）にとっては、連続した実習教育である。所属する機関や業務内容が異なっているが、精神保健福祉士の価値や倫理は共通しており、実習生（学生）の到達目標は同じである。今後は、医療機関だけでなく、地域の障害福祉サービス事業所等も含めたすべての実習先で共通して使用できる、評価尺度の開発の検討も行っていきたい。また同時に、今回は精神保健福祉士養成における実習指導において、ソーシャルワーカーの価値をどのように体得させるか、実習評価尺度の導入を通して試みた。しかしこれは、あくまでも一つの方法に過ぎない。評価尺度以外の方法や、現場での実習プログラムのあり方、実習スーパービジョンのあり方、実習先と養成校との連携と協同のあり方を模索していくことも、今後の課題である。

付記

本研究は、大妻女子大学人間生活文化研究所平成28年度大学院生研究助成(B)(課題番号:DB2801)及び平成29年度大学院生研究助成(B)(課題番号:DB2901)より、研究助成を受け行った。

主要参考文献

- [1] 一般社団法人日本社会福祉教育学校連盟編「ソーシャルワーク・スーパービジョン論」、中央法規、2015年
- [2] Dannelle D.Stevens, Antonia J.Levi, 佐藤浩章監訳, 井上敏憲, 俣野秀典訳, 「大学教員のためのルーブリック評価入門」, 玉川大学出版部, 2018年
- [3] 黒川昭登「スーパービジョンの理論と実際」, 岩崎学術出版, 1992年
- [4] 一般社団法人日本精神保健福祉士養成校協会, 「精神保健福祉士の養成教育論-その展開と未来」, 中央法規, 2016年

イヌの介在による心理学的効果の検証

—心理臨床場面への応用に向けて—

Mental health benefits of interacting with dogs
—Toward application to clinical psychology—

金井 正美
Masami Kanai

大妻女子大学大学院 人間文化研究科 臨床心理学専攻

キーワード：イヌ，動物介在介入，臨床心理学

Key words : Dog, Animal assisted intervention, Clinical psychology

1. 問題と目的

動物が人の心身へ与えるポジティブな効果を「治療法」として体系化し、積極的に活用しようとするのが「動物介在療法」である(磯邊, 2003). 心理療法の現場に動物を取り入れることは古くからあった. 精神分析の創始者の Freud, S. は自身の飼い犬をセッションに同席させていたし (Homans, J., 2014), 日本においても, 森田療法で治療に動物の飼育が取り込まれている(門多, 2015). しかし, 実証的な論文は長い間発表されず, 世評のようなかたちで語り継がれるのみで, 決め手に欠ける状況が続いている.

そこで本研究では, 人と最も絆を結びやすいとされているイヌを介在動物として, 「人」— [動物(イヌ)] — [人] という三項関係で生じる心理学的効果に焦点をあて, 心理臨床場面においてイヌを介在させることに対する応用可能性を探る.

2. 研究1

目的に沿って研究1では日常の公共場面である職場にイヌを介在させ, 心理学的効果の検証を行った.

2-1. 方法

・実験期間：2018年5月22日～25日の4日間
・実験協力者：A社社員様16名(女性14名, 男性2名), 20代～40代(平均30代)
・実験の流れ及びデータ収集の方法：図1に実験の流れを示す. 実験1カ月前には, 実験協力についての説明をした上で同意をとり, 実験前調査票を実施した. 実験前調査票では主に, 職場内における

人間関係及びコミュニケーション頻度に関する質問項目や, 動物の飼育歴, イヌの好悪といった動物に関する質問項目, さらに実験協力者の対人恐怖に関する個人の特徴を把握することを目的として, 対人恐怖心性尺度(堀井・小川, 1996; 1997)を実施した. イヌ介在実験期間4日間は, イヌがいない日とイヌがいる日を交互に設定し, セラピー犬との触れ合い可能時間(12:00～18:00)はいつでもセラピー犬に触れ合えるようにした. 実験期間中は以下の(1)～(4)の測定項目を実施した. (1)行動記録表:「楽しい」「リラックス」「緊張」「だるい」「集中」「穏やか」「イライラ」「悲しい」「その他」の気分・状態の9項目(複数選択可)から1時間おきに, その時間の気分・状態を選択した. (2)CES-D Scale 日本語版(島・鹿野・北村・浅井, 1985):抑うつ状態を把握するために実施した. (3)POMS2 日本語版成人用短縮版(POMS2):実験協力者がおかれた状況により変化する一時的な気分, 感情の状態を測定することを目的として, 始業時及び終業時の1日2回の回答を求めた. (4)バイタルセンサー:事前の希望調査で, 希望した5名にのみ, バイタルセンサーを4日間連続で装着し, 副交感神経や交感神経の測定を実施した. 実験終了後には, 実験協力者全員に実験後インタビュー調査を実施し, KJ法を用いて分析した.



図1. 実験の流れ

2-2. 結果と考察

イヌとの触れ合いがあった日には、行動記録表及び POMS2 から、ネガティブな気分と緊張状態の低下がみられ、楽しい気分やリラックス状態といったポジティブな気分・状態が増加する可能性が示された。バイタルセンサーからは、副交感神経が亢進してリラックスし、ストレスが低減する可能性が示唆された。さらに、実験後インタビューからは、「イヌ」が「人」と「人」の間で社会的な潤滑油となり、他者との会話の増加などの対人関係の変化が生じたことが示唆された。そして最終的に、実験後インタビューの KJ 法による分析から、以上で述べたそれぞれの効果は円環的に影響し合うことが考察された。

3. 研究 2

研究 2 では、臨床心理を含めた対人援助の専門職および動物介在教育・療法の研究教育に携わる獣医師に対して、動物介在についてのインタビュー調査を実施した。

3-1. 方法

- ・調査期間：2017 年 9 月～2018 年 2 月
- ・調査対象：各領域の専門家 7 名
- ・インタビュー所要時間：約 30～90 分
- ・調査項目：動物介在療法導入への賛否や、動物介在療法が有効と考えられる場面など。
- ・分析：KHCoder

3-2. 結果と考察

インタビュー結果を逐語化し、計量テキスト分析による対応分析を行った結果、専門家たちの語りは評価的な視点からの「私見的评价—治療効果についての評価」と、動物の介在を取り入れようとする語りと動物の介在実施に慎重な意見である「実践への示唆—実施への懸念」の 2 つの軸で解釈された。

「私見的评价」と「実践への示唆」の領域には介護施設の施設長が布置され、「実践への示唆」と「治療効果についての評価」の領域に獣医師が布置された。そして「実践への懸念」と「治療効果についての評価」の領域に臨床心理士 A が布置された。以上の 3 名の専門職はいずれも 50～60 代のベテランであり、それぞれ独自の領域に布置された。一方、40 代前後の中堅専門職の 4 名(介護福祉士、作業療法士、理学療法士、臨床心理士 B)は、「私見的评价」と「実践への懸念」の領域に布置された。

さらにイヌが介在することで心理臨床において

予想される効果について、面接初期や、思春期のケースにおけるラポール形成の促進や、CI の自己対象になる可能性、不登校の子どもがいる家庭での家族関係の変化について言及された。

4. 総合考察

研究 1 では、イヌが介在することによって、「人—[動物(イヌ)]—[人]という三項関係においてイヌが社会的な潤滑油として対人関係に変化をもたらし、心理的、身体・生理的には副交感神経が亢進してリラックスする可能性が示唆された。研究 2 では、心理臨床場面においてイヌが介在することで効果があると予想される具体的な 3 つの場面が示された。

本研究で得られた結果を総合し、図 2 のように整理した。イヌを心理臨床場に介在させることにより、(1)ラポール形成の促進、(2)カタルシス・適度な退行、(3)自己愛を満たす、の 3 つの効果が期待できると考えられる。加えて補足的な考察ではあるが、イヌを家庭で飼育することによって(4)家族関係の変化の効果が生じ、それにより間接的に心理療法に変化をもたらされると予想された。本研究で得られた知見をもとに、実際の心理臨床場面で検討していきたい。

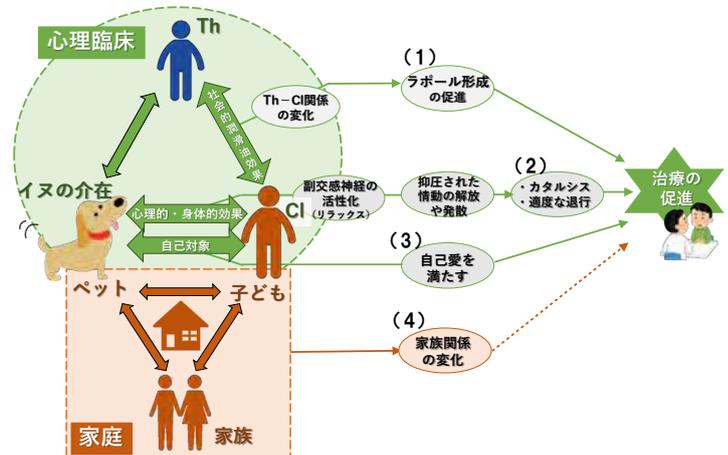


図 2. イヌを介在させることで生じる効果

付記

本研究は、大妻女子大学人間生活文化研究所平成 29、30 年度大学院生研究助成(B) (課題番号 DB2909, DB3005)より研究助成を受け行った。

一般臨床群における心理相談室への被援助中断に関する探索的研究

Dropout and related factors in general psychological counseling

上坂 緑

Midori Kamisaka

大妻女子大学大学院 人間文化研究科 臨床心理学専攻

キーワード：カウンセリング，中断，M-GTA法

Key words : Counseling, Dropout, Modified Grounded Theory Approach

1. 目的

クライアント（以下CI）がカウンセリング（以下Cog）を経てどのような変化が起きたら終結とするか、終結の指標は学派や各セラピスト（以下Th）個人によって異なる場合も多い。終結の指標を大きな枠組みで捉えている臨床家もいれば、非常に細かい視点で終結の指標を定めている臨床家もいる。共通しているのは、対人関係に良い変化が起こるとしている点や、環境への適応が良くなる点、自己成長がなされた点であると考えられる。これらの指標が達成されないうちにCogを辞めたなら中断といえるが、中断の定義も研究者によって異なり、CIの抱える問題が解決・改善する前に利用を中止することを指す場合や、回数または期間によって定義する場合もある。心理療法は他のメンタルヘルスサービスよりは低いものの、それでも5分の1は中断していることが

Swift&Greengerg(2012)では示されていた。諸研究者らがこれまでに中断要因に関して研究してきたが、CIがどのような要因によって中断を選択するのか、CI視点からの研究は少数であるため未だ不明瞭な点もある。よって本研究では、CIの視点からCogの中断要因を明らかにし、その要因を取り除く取り組みを考察することを目的とした。

本研究では横田（2016）が定義した①おおよそ10回までに②Th及びCIが合意した目標に達成しない時点で、③CI自らが利用をやめることを中断と定義とした。Cogにおける中断の可能性が最も高いのは初回面接後であろうことを踏まえ、本研究においては幅広い中断例を研究するため、また一度のCogでの中断であってもCI側からすればCogを体験したと認識されると考えたため、あえて

Cog回数の下限は定めずに研究を行った。

2. 方法

調査期間：2018年7月1～12月

研究協力者：スクールCog及び学生相談を除く一般のCogルーム、またはクリニック併設のCogルームでのCog中断した経験のある一般臨床群5名

表1 研究協力者のプロフィール

研究協力者	年齢	性別	ケース1			
			機関	Th特徴	回数	Cog時年齢
A	20代半ば	女性	クリニック併設	男性	1回	20代前半
B	20代半ば	女性	個人開業	男性30代半ば	6、7回	20代前半
C	20代半ば	女性	個人開業	女性5、60代	1回	10代前半
D	50代後半	女性	個人開業	男性50代	4、5回	50代前半
E	30代前半	女性	クリニック併設	男性40代	12回程	10代後半
			クリニック併設	女性4、50代	20回前後	20代前半

調査方法・内容：中断した当時の心境や状況に関する半構造化インタビュー。加えて作業同盟目録クライアント版、心理的距離評定尺度への回答に基づく質問をインタビューした。

3. 結果と考察

計量テキスト分析においては、特筆すべき結果が出なかったため結果の記述は省略する。

M-GTA法による分析の結果、7個の大カテゴリーとその下に14個の中カテゴリー、さらにその下に29個のサブカテゴリーが生成された。尚、大カテゴリーは<>、中カテゴリーは《》、サブカテゴリーは【】、概念は『』で表す。

まず、CIがCog中断に至るまでの時期を、大きくCog前、Cog中、Cog後とした。中断に至るま

での過程は<1. Cog 前><2. 第一印象><3. 関係性><4. 技法><5. 決定的な亀裂><6. 中断><7. 中断後振り返って>と7つの段階に分かれ

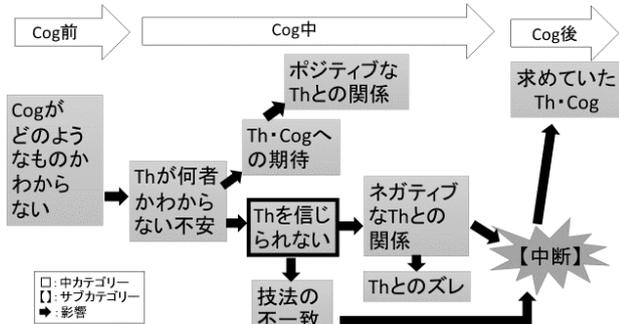


図1 「CI視点の中断に至るプロセス」結果簡略図

<1. Cog 前>, CIは《Cogがどのようなものかわからない》不安を抱えており,それは解消されないままCogに臨むこととなる.Cogが始まると,<2. 第一印象>として自己紹介の無さや名乗ってくれないことから《Thが何者かわからない不安》を抱き,それにより始まる前から抱いていた不安はさらに高まるが,CI視点でThをアセスメントしていくことにより,《Th・Cogへの期待》を高めていき,《ポジティブなThとの関係》を築いた瞬間も中断例の中に存在した.しかしそれとは反対に,アセスメントやThからの非共感的であったり非受容的な態度・言動により《Thを信じられない》と判断する様子も示される等,場面や時期,CIによって様々な<3. 関係性>がThとの間に構築されていった.しかし,《Thを信じられない》ことからCIとThの関係性は崩れていった.《Thを信じられない》中で<4. 技法>が自分には合わないとCIが勇気を出して伝えたにもかかわらずTh側の技法が変わらなかつたりと,《技法の不一致》を訂正出来ず,CIは諦めを抱きながら中断を選択しようかと考えるようになっていった.つまり,《Thを信じられない》故に<5. 決定的な亀裂>は生まれていった.自身の事をわかってくれない感覚や,お互いの共通認識ができていない《Thとのズレ》が浮き彫りになっていった点も,《ネガティブなThとの関係》を増長させる一因であった.結果《ネガティブなThとの関係》は加速し,《Thとのズレ》はCogにおける方針のみならずCIの,CIが望む方向ではなくThが望む,CIはこうあるべきだという方向に進まなければいけないのだろうかという感情や,ThはCIがCogをどのように捉えているかわかっていないであろう,それ故ズ

レが生まれているのだろうとCIに不信感を抱かせることとなった.そのような《ネガティブなThとの関係》から,CIは怒りや傷つきを抱えながら【中断】を選択していった.しかし,時間を置いて<7. 中断後振り返って>みると,Cogとは自身が体験したような辛い体験ではなく,本来は助けとなるようなものであるべきなのだ『中断を経ての気づき』があり,そこから本当に自分が求めていた応答や求めていたTh像に気が付き,《求めていたTh・Cog》とは何だったのか理解し,もう一度Cogにチャレンジしてみようという気持ちが起こっていったり,振り返って冷静に傷ついた体験を見つめなおす作業を行うことが可能となった.

4. まとめと今後の課題

以上より,CIがCog中断を選択するまでの過程とその要因が推測された.本研究においては要因の中でも特に<3. 関係性>の中の《カウンセラーを信じられない》という中カテゴリが最も他のカテゴリや概念に影響を与えていたため,Cogの中断において重要な要因であると推測された.Cogは個人差が大きいため,一概にこのような方法を取れば中断は起きない,と断じることは難しいが,肯定的・受容的・共感的態度を崩さず,アセスメントを丁寧に行ったり,スーパーヴィジョンをしっかりと受けるといった基本に忠実なCogを心掛けることが必要なのではないだろうか.

今後は研究協力者をより多く募集し,全員をまとめた分析だけでなく個人内の分析も行うことにより,また新たな視点を獲得することが可能となるであろう.

付記

本研究は平成29年度の大妻女子大学生命科学研究の倫理審査委員会の承認を得ている(承認番号:29016)。

また,本研究は,大妻女子大学人間生活文化研究所平成29年度,及び平成30年度大学院生研究助成(B)(課題番号DB2910,DB3006)より研究助成を受け行った。

主要参考文献

- [1] Swift, J. K., & Greenberg, R. P. (2012). Premature discontinuation in adult psychotherapy: A meta-analysis. *Journal of Consulting and Clinical Psychology, 80*, 547–559.

初学者における心理療法の終結

—喪失反応に注目して—

The reflections of termination of the psychotherapy by beginning therapists

—Attention to loss reaction—

神山 ルリ乃

Rurino Kouyama

大妻女子大学大学院 人間文化研究科 臨床心理学専攻

キーワード：初心者，喪失反応，喪の作業

Key words : Beginning therapist, Loss reaction, Morning work

1. 序論

近年、臨床心理士の社会的な認知度の高まりと比例して資格取得者数も増加し、平成29年度からは心理に関する支援を行う国家資格である公認心理師も誕生したことから、心理臨床家としての資質の向上が今後の課題となっている。心理臨床家として最も中心的な活動である心理療法については、大学院におけるケース担当実習が重視されており、心理臨床家としての資質を養う上で重要な役割を果たしているといえるだろう。

臨床心理士や公認心理師を目指すもの(以下：初学者)は、無力感・否定的な感情および逆転移への対処が困難で、それらを用いてクライエント(以下：CI)を理解することが難しいなどの心理的特徴と、初学者特有の課題とが重なり不安定になりやすい(鈴木, 2012)。特に心理療法の終結はCIだけでなくセラピスト(以下：Th)にも様々な感情を想起させるため非常に難しく、別れに対する反応を味わうための「お別れの作業(mourning work)」が必要(馬場, 1999)であるが、初学者における終結期は修士論文の作成・発表や就職など院生を取り巻く外的状況が大きく変化して院生の集中がケースから離れがち(青木, 2010)であるなど大学院特有の要因も複数重なり、CIとの「お別れの作業」は十分になされていないと考えられる。

しかし、ケース担当実習に関する一連の体験から初学者がどのような心理のプロセスを経て、心理臨床家としての専門性を身につけていくのかといった研究は始まったばかりであるため、実証的

な研究は極めて少ない(黒川, 2016など)。

そこで本研究では、ケース担当実習の終結期における体験の中でも、喪失反応に注目し、初学者がどのように向き合い終結・引継ぎに至ったのか、そのプロセスを探索的に検討することを目的とする。また、終結における情緒体験プロセスから仮説モデルを生成する。したがって、本研究では大学院におけるケース担当開始前から終了後および現在の臨床活動までを一連のプロセスとした。

2. 方法

調査対象者 臨床心理士指定大学院修了後3年以内の者10名(平均年齢：25.4歳, $SD=0.97$)

調査内容 2018年7月から10月にかけて、A大学キャンパス内の面接室などにおいて、ケース担当実習開始前から終了後までのThの情緒的体験プロセスを明らかにするための半構造化面接を行った。なお、インタビューに先立ち質問紙調査(使用尺度：専門職アイデンティティ尺度(元木ら, 2014)、自意識尺度(菅原, 1983))にも回答を得た。

分析方法 質問紙調査は統計的な処理を行い、半構造化面接で得られたデータは逐語化し、M-GTAを用いた。

3. 結果と考察

本項では、M-GTAの結果を示す。分析の結果、3つの大カテゴリーとその下に15個の中カテゴリー、さらにその下に27個の小カテゴリーが生成された。なお、ケースの時期を《 》、大カテゴリー

一は【 】, 中カテゴリーは【 】, 小カテゴリーは【 】で示す。

初学者のケース担当実習プロセスには「開始前」→「初期」→「中期」→「終結期」→「終了後」の5つの時期があり、それぞれの時期で【CI-Th 関係要因】、【Th 要因】、【教育カリキュラム要因】が複雑に影響しあいながら経過をたどっていた。

「開始前」において、初学者の関心は目の前にあるCIとの出会いに注がれており、その先にあるCIとの別れについて考えを巡らせることが難しく、この時期に終結について講義で学習していても「終結期」まで覚えている者はほとんどいなかった。

「初期」では、初回セッションにおいて経験したことの無い状況への不安や緊張が、次第に「自分はThとして役にたっているのだろうか」という不全感に変化していた。また、CI理解が深まらずその原因をTh自身に帰属したりCIに苛立ちを感じたりする者も多く見られたが、未熟さへの悩みや否定的な感情をスーパー・ヴァイザー(以下:SVor)と共有し整理すると解消されることが明らかとなり、SVorとの安定した関係性の中で適切なサポートを受けることの重要性が示唆された。

「中期」ではCI-Thの関係性が確立され、「お互い安心できる関係」が構築されると心理療法が深まることが明らかになった。反対に「お互い居心地悪い関係」にとどまると心理療法が深まらないことが明らかとなった。

「終結期」では、多くの事例において「お別れの作業」が行われていた。「お別れの作業」は、①「お互い安心できる関係」のなかで2人でお別れを味わい終了した事例、②「お互い安心できる関係」だが別れを味わわないまま終了した事例、③「お互い居心地悪い関係」のまま別れも味わわずに終了した事例の3パターンに分かれ、「中期」からのTh-CI関係だけでなく、CIやThの要因も大きく影響していることが明らかになった。また、ケースが終了する同時期にSVが終わることへの寂しさを感じている者もあり、CI-Th-SVorというパラレルプロセスが生じていた。さらに、青木(2010)の指摘通り、終結期は修士論文の作成・発表や就職活動などThの外的状況が大きく変化しており、心理療法にも少なからず影響を及ぼしていたことから、初学者の物理的・心理的な負担は大きく、今後教育カリキュラムの見直しが課題であると考えられる。

「終了後」教育カリキュラムにおいてケース全体を振り返る機会が与えられると、ケースに対する未消化な気持ちの整理がなされていた。また、「お別れの作業」を遂行したThや「終了後」に「ケースに対する未消化な気持ちを整理する」ことのできたThは、現在の臨床活動においてケース担当実習で実践した「CIとの向き合い方は今も変わらない」と語り、ケース担当実習での学びを現在の臨床活動の中に再配置していると考えられる。

このようにケース担当開始前からケース終了後までを含めたケース担当実習の一連のプロセスは、初学者にとって後々の臨床態度を支える貴重な原体験となり、心理臨床家としての成長につながると考えられる。

4. 本研究の問題点と今後の課題

本研究の問題点は、①ケース担当実習をポジティブな体験として経験している調査協力者が多かったため、先行研究で指摘されていた「終結期」の問題が上がりなかった、②レトロスペクティブな調査方法をとったため、その当時のリアルな混乱や戸惑いなどをすべて拾い切ることには限界があった、③サンプル数が10と少なく、M-GTAの分析においては理論的飽和まで達成できなかったが、量的分析結果と先行研究との統計的な比較ができなかった、の3点が挙げられる。今後は、ケース担当実習におけるネガティブな体験をもつ者も負担なく協力できる調査計画をたてることや、プロスペクティブな調査方法を計画するなど、さまざまな視点から初学者における心理療法の終結について検討する必要があると考えられる。

5. 付記

本研究は平成29年度の大妻女子大学生命科学研究の倫理審査委員会の承認を得て行われた(承認番号:29-027)。

また、本研究は平成29年度大妻女子大学人間生活文化研究所の助成(DB2915)および平成30年度大妻女子大学人間生活文化研究所の助成(DB3010)を受けて行われた。

主要引用文献

[1]青木佐奈枝(2010). 臨床心理面接ケース担当実習に関する一考察 東京成徳大学臨床心理学研究, 10, 28-39.

女性同性愛者のアイデンティティ形成について

—異性愛主義の視点に注目して—

Identity formation of lesbian people

—Focused on heterosexism—

田中 有沙

Arisa Tanaka

大妻女子大学大学院 人間文化研究科 臨床心理学専攻

キーワード：女性同性愛者，異性愛主義，複線経路・等至性モデル(TEM)

Key words : Lesbian, Heterosexism, Trajectory Equifinality Model(TEM)

1. 目的

近年の日本では性的マイノリティに対する認識や受容が広がりつつあるものの未だに異性愛主義が根強く残り，多くの性的マイノリティは生きづらさを感じている。中でも女性同性愛者は社会から不可視化され，ロールモデルが不在であることから，一般の人々が女性同性愛者へどのようなイメージや考えを抱いているのか，女性同性愛者はどのようなプロセスでアイデンティティを形成しているのかは明らかとなっていない。そこで本研究の研究1では，一般の若者の異性愛主義傾向，性的マイノリティおよび女性同性愛者への認識，女性同性愛者へのイメージ・考えについて，研究2では，女性同性愛者のアイデンティティ形成プロセスを明らかにすることを目的とする。

2. 研究1

2-1. 方法

- ・調査協力者:男性 96名(平均 22.1歳)，女性 101名(平均 18.9歳)，その他の性別 1名(24.0歳)
- ・時期:2018年6月～11月
- ・手続き:①Ambivalent Sexism Inventory 尺度日本語版 21項目(宇井・山本, 2001)(以下 ASI 尺度)，②性的マイノリティならびに女性同性愛者に対する認識調査 5項目(河口ら(2016)の調査を参考に作成)，③女性同性愛者に対するイメージや考えの自由記述，以上を質問紙にて実施した。

2-2. 結果と考察

ASI 尺度の結果は，標準値よりも低いことが明

らかとなった。近年では人々の性的マイノリティに対する認識や受容が促進されていることが考えられた。性的マイノリティならびに女性同性愛者に対する認識調査では，女性同性愛者という言葉の説明はできると回答する者が多かったが，存在を認識している者は少なかった。女性同性愛者が社会から不可視化されているために，女性同性愛者の実際を把握する者が少なかったのだろう。また，異性愛主義傾向高群にて性的マイノリティならびに女性同性愛者への認識が低く，低群にて認識が高いことが明らかとなった(表1)。

表1. 異性愛主義傾向と性的マイノリティ・女性同性愛者に対する認識の関連

	高群 (N=99)	低群 (N=99)	t値
性的マイノリティ	2.35 (0.61)	2.68 (0.45)	3.15**
女性同性愛者	2.39 (0.22)	2.66 (0.22)	4.09***

p<.01*p<.001

次に自由記述についてのKJ法の結果を図1に示す。女性同性愛者に対するイメージでは「女性のことが好きな女性」などの説明的な回答や，「かっこいい」などの外見からのイメージを回答する者が多かった。女性同性愛者に対する考えについては「恋愛は自由」「社会制度が変わるべき」など，女性同性愛者に理解を示す回答や，「生きづらそう」など，女性同性愛者の生きづらさを認識している回答が見られた。若者の女性同性愛者への認識や理解の改善が示唆された。一方で，イメージ・考えともに「分からない」「特になし」などの回答が

多く見られたことから、女性同性愛者に対する人々の傍観者の態度があることが考えられた。

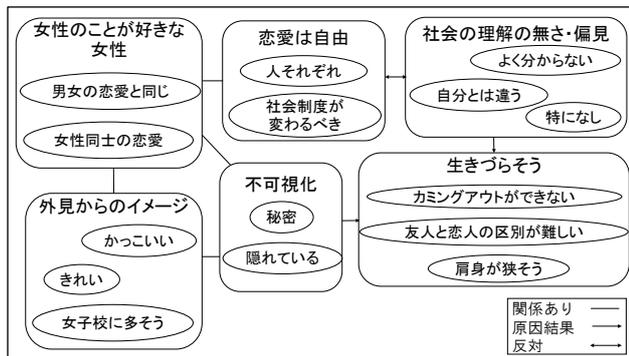


図 1. 女性同性愛者に対するイメージと考え(簡略図)

3. 研究 2

3-1. 方法

- ・調査協力者:女性同性愛者 4 名(平均 22.3 歳)
- ・時期:2017 年 10 月～2018 年 7 月
- ・手続き:調査協力者へ個別に半構造化面接を各 3 回実施
- ・インタビュー項目:セクシュアリティ, カミングアウト, ロールモデル, 将来等について.

3-2. 結果と考察

女性同性愛者のアイデンティティ形成プロセスを複線経路・等至性モデル (安田・サトウ, 2012) によって分析した結果を図 2 に示す. 4 名のプロセスは, Cass(1979)や Troiden(1989)の提唱した同性愛者のアイデンティティ形成プロセス理論におおよそ則していた. はじめは自身のセクシュアリティについて明確でなかったが, 徐々に女性を性的指向とすることを自覚し, 異性愛主義的環境と自身のセクシュアリティの狭間で葛藤したが, 家族や友人にカミングアウトをしたことを通して女性同性愛者としてのアイデンティティを形成していることが明らかとなった. 女性同性愛者のアイデンティティ形成の抑制要因としては, 異性愛主義的環境や, 周囲の同性愛者に対する差別発言などがあり, 促進要因としてはロールモデルとなる性的マイノリティとの出会い, 周囲によるセクシュアリティの受容などがあつた. さらに, ロールモデルの不在や友人と恋人の区別が難しいなど, 女性同性愛者特有のアイデンティティ形成におけ

る困難性のあることが考えられた.

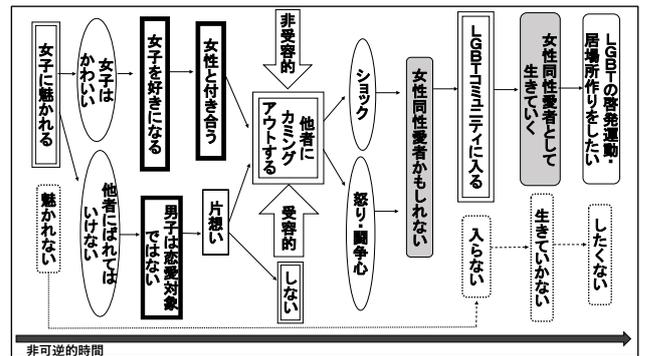


図 2. 女性同性愛者のアイデンティティ形成プロセス(簡略図)

4. まとめと今後の課題

研究 1 における若者は異性愛主義傾向が低いものの, 女性同性愛者に対して「分からなさ」や「見えにくさ」を感じ, 距離を取ろうとする傾向にあることが考えられた. 研究 2 では調査協力者が異性愛主義的環境と自身のセクシュアリティとの間で葛藤しながらも, 最終的には女性同性愛者としてのアイデンティティを形成していることが明らかとなった. 特に, 女性同性愛者の自認が得られたのちにカミングアウトをし, 受け入れてくれる他者や, ロールモデルとなる性的マイノリティに出会うことによって女性同性愛者として生きていく決意につながっていた. 周囲の環境が女性同性愛者に対して受容的であるほど, 女性同性愛者が自身のセクシュアリティに悩まず, 自分らしく生きていけることが考えられた.

今後の課題としては, インタビュー調査における調査協力者の年齢層を広げ, 青年期以降を含めた女性同性愛者のアイデンティティプロセスを明らかにすることであると考えられる.

主要参考文献

- 河口和也・釜野さおり・石田仁・風間孝・吉仲崇(2016). 性的マイノリティについての意識—2015 年全国調査 報告書. 科学研究費助成事業 「日本におけるクィア・スタディーズの構築」 研究グループ (研究代表者広島修道大学河口和也) 編.
- 安田裕子・サトウタツヤ(2012). TEM でわかる人生の経路 質的研究の新展開. 誠信書房

現代女子青年の友人関係の取り方と自己愛傾向、自尊感情との関連について

About the way of taking friendship of contemporary girls' youth and the relationship between narcissism tendency and self-esteem

田向 優

Yu Tamukai

大妻女子大学大学院 人間文化研究科 臨床心理学専攻

キーワード：青年期，友人関係，自己愛傾向，自尊感情

Key words : Adolescence, Friendship, Narcissistic, Self-esteem

1. 目的

青年期における友人関係は、自身が社会に適応するための様々な役割を担っている。保坂・岡村(1986, 1992)は、青年期の仲間関係(友人関係)のプロセスとして、①ギャング・グループ、②チャム・グループ、③ピア・グループの発達段階があると述べている。しかし、保坂(2010)は仲間関係の発達には、ギャング・グループの消失、チャム・グループの肥大化、ピア・グループの遷延化といった変化が生じてきていると述べている。

また、小塩(1998)と岡田(2007a, b)はそれぞれ青年期の友人関係を自己愛によって分類した。両者の分類を比較すると、小塩(1998)は友人関係を4群、岡田(2007a, b)は3群と捉えており、一貫した結果が得られていない。その上、小塩(1998)が分類のために使用したNPI(自己愛人格目録)は、自己愛の健康的な側面を測る尺度なのか、自己愛の病理的な面も測定できる尺度なのかについても、一貫した知見が得られていない。

そこで本研究では、①小塩(1998)、岡田(2007a, b)で使用された友人関係尺度を再度検討し類型化を図り、各類型の特徴を把握すること、②NPIと自己愛の健康的な側面と病理的な側面の両方を測定することができる評価過敏性—誇大性自己愛尺度(中山・中谷, 2006)を基に、新たに自己愛を測定する尺度を作成すること、③自己愛傾向が青年の友人関係の取り方に及ぼす影響を検討することを目的とした。

2. 方法

調査対象者

都内の私立女子大学に通う大学生1年生から4年生、大学院生計250名であった。筆者が学生に直接依頼をし、調査対象者の自由意思の下で回答が行われ、回答しないことで対象者に不利益が生じることはないこと、回答は研究のみに使用することと調査内容の説明をし、合意を得た者のみを対象とした。なお謝礼は提示していない。

調査期間

2018年11月16日(金)~12月11日(火)であった。

調査方法

個別自記入式の質問紙調査で行われた。授業時に筆者の依頼に応じてその場で回答する集合調査形式と、大学構内で筆者から個別の依頼に応じて回答する個別配布・個別回収式の2通りで行われた。回答は全て無記入で行われ、実施時間は依頼・説明・回答を含めて15分程度であった。

調査内容

調査内容は表1に示すように、設問1から設問4で構成されていた。

表1 質問紙の構成

1. 友人関係尺度 [設問1]
2. 自己愛人格目録 (NPI) (大石・福田・篠置, 1987) [設問2]
3. 評価過敏性—誇大性自己愛尺度 (中山・中谷, 2006) [設問2]
4. 自尊感情尺度 (山本・松井・山成, 1982) [設問3]
5. フェイスシート [設問4]

3. 結果と考察

因子分析の結果、友人関係尺度は適度な距離、真剣な関わり、恥の回避、積極的楽しさ、集団同調の5因子構造であった。さらに友人関係尺度について二次因子分析を行った結果、距離を取ろうとする関係と仲間を求め真剣に関わる関係の2因子構造となった。NPIは自己確信、自己主張、顕示性、優越性の4因子構造であり、評価過敏性—誇大性自己愛尺度は先行研究通り誇大性と評価過敏性の2因子構造、自尊感情尺度は1因子構造であることが確認された。

(1)友人関係の取り方による自己愛傾向の違い；友人関係尺度の二次因子分析で抽出された2因子(距離を取ろうとする関係・仲間を求め真剣に関わる関係)を独立変数とする分散分析の結果、NPI合計は2因子とも有意であり、誇大性と評価過敏性は距離を取ろうとする関係が有意であった。例えば、距離を取ろうとする関係が低く、仲間を求め真剣に関わる関係が高い群ほどNPI合計は高く、その逆の群は低かった。また、距離を取ろうとする関係が低い群ほど誇大性は高く、評価過敏性は低かった。

(2)友人関係と自己愛傾向、自尊感情の相関関係；相関分析の結果、NPIの全ての下位尺度が誇大性と正の相関を示し、NPIは主に誇大性を測定することが示唆された。しかし「顕示性」が評価過敏性とも正の相関を示し、NPIには評価過敏性の要素も一部含まれていることが明らかになった。また、NPIと評価過敏性—誇大性自己愛尺度と自尊感情の関連は、NPIは「顕示性」を除いて自尊感情に正の相関、誇大性に正の相関、評価過敏性には負の相関がみられた。

(3)自尊感情と自己愛傾向が友人関係の取り方に与える影響；探索的に重回帰分析を行った結果、自尊感情が自己愛傾向を媒介して友人関係の取り方に影響することが示唆された。具体的には、自尊感情は友人関係の取り方に直接的な影響を与えるとともに、自己愛傾向を媒介させて友人関係の取り方に影響を及ぼしていた(図1)。自己愛傾向と友人関係の取り方との関連は、NPI合計が高いほど友人に対して、適度な距離は取らず、恥の回避もせず、積極的楽しさも求めず、逆に真剣な関わりや集団同調を求めることが示された。一方、誇大性が高いほど友人に対して適度な距離を取り、積極的な楽しさを求めることが示され、評価過敏性

が高くなるほど、誇大性同様、適度な距離を取り、積極的楽しさを求めるが、恥の回避も行うことが明らかになった。

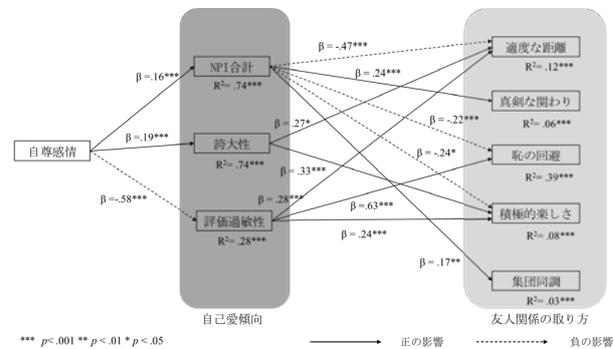


図1 自尊感情を介して自己愛傾向が友人関係の取り方に及ぼす影響についてのパス・ダイアグラム

4. まとめ

以上より、友人関係尺度に関しては、元の尺度と比較すると項目の組み合わせが異なり、内容的にも新たな概念が抽出されたことから、対象者が異なることにより因子構造が変わる可能性も含め、友人関係を測定する尺度形成の難しさを明らかにするものであった。また今回作成されたNPIでは自己愛の健康的な面である誇大性と病理的な面である評価過敏性のそれぞれの特徴を部分的に測定はできるものの、全体の特徴を捉えるには限界があることが示唆された。そして、自己愛傾向から友人関係の取り方に及ぼす影響を検討した結果、NPIで測定できる自己愛の側面と誇大性・評価過敏性の側面が友人関係尺度の下位因子にそれぞれ影響を及ぼしていることが明らかになった。

付記

本研究は大妻女子大学人間生活文化研究所平成30年度の大学院生研究助成(B)(課題番号DB3019)の研究助成を受け行った。

主要参考文献

- [1]岡田努(2007a). 大学生における友人関係の類型と、適応及び自己の諸側面の発達の関連について パーソナリティ研究, **15**(2), 135-148.
- [2]小塩真司(1998). 青年の自己愛傾向と自尊感情、友人関係のあり方との関連 日本教育心理学研究, **46**, 280-290.

カウンセラーの介入の違いが反芻・省察および抑うつなどの症状や、 自尊感情・自己への思いやりに及ぼす影響

The effect of counselor's different interventions on client's rumination and reflection and depression,
self-esteem and self-compassion

藤田 歩美
Ayumi Fujita

大妻女子大学大学院 人間文化研究科 臨床心理学専攻

キーワード：反芻，省察，カウンセリング実験

Key words : Rumination, Reflection, Counseling experiment

1. 問題と目的

反芻はネガティブで慢性的、かつ持続性の強い自己注目とされ、自己への脅威や喪失、不正によって動機付けられると定義されており、不安、抑うつ、怒りと結びついた自己関連の繰り返しの思考とされている(高野ら, 2010)。また反芻傾向が高い人は自己受容ができず、自己開示の内容もネガティブなものに偏ってしまうことが明らかになっている(高野ら, 2012)。高野ら(2009)は反芻はそれ自体が抑うつのリスクファクターであると述べている。省察は自己への好奇心や興味によって動機づけられ、自己理解や精神的な健康の促進に寄与しているとされている(高野ら, 2010)。また、省察傾向の高い人は自己受容感が高く、肯定的な自己評価を行っているため、適切な自己開示ができることが高野ら(2012)によって述べられている。しかしなぜ人はネガティブな出来事に対して反芻を行うのだろうか。その理由の1つに人は憂鬱な気分になるにも関わらず、トラウマティックな状況や重大な否定的生活事象にさらされると、その経験や関連する感情を他者に話す傾向があるとされている。川瀬(2000)は情動的経験を語る際には対人的な関係を求め、そこで相手から理解、受容されるという経験を通すことによって自らの信念を再構築しようとしているのではないかと述べている。これらのことから、反芻はネガティブな出来事が起こると必然的に行うものであると考えられるが、よりネガティブな反芻をしない為には人を介し、自らの信念を再構築することが一つの手

段であるのではないだろうか。そこで本研究では開示者が受容感を感じることが多いであろうカウンセリング場面を設定し、被開示者であるカウンセラーの態度の違いが開示者のネガティブな出来事に対してどのように影響を及ぼすか検討を行う。カウンセラーの態度として藤田(2017)の研究で効果が見られた「肯定介入」、「感情体験を深める介入」に加え、うつに効果的とされている認知行動療法の手法の1つである「認知再構成法」を用いる。本研究は、認知再構成法、肯定介入、感情体験を深める介入という3つの技法が反芻・省察および抑うつなどの症状や、自尊感情・自己への思いやりにどのように影響を及ぼすのかを明らかにすることを目的とした。

2. 方法

介入条件の群分けを行い(図1)、初回のインターク面接に続き、それぞれ1回50分のカウンセリングを1条件3回ずつ計10回、臨床心理士に依頼し実施した。毎セッション後に質問紙を実施し、1条件のカウンセリングが終了ごとにインタビュー調査を実施した。質問紙の構成は表1に示す。

表1 質問紙の構成

1	表紙
2	Rumination-Reflection Questionnaire 日本語版(5件法)[設問1]
3	SPACE; 心理症状尺度(5件法)[設問2]
4	II P; 対人関係問題尺度(5件法)[設問3]
5	Self-compassion; 自己への思いやり尺度(5件法)[設問4]
6	自尊感情尺度(5件法)[設問5]
7	WAI; 作業同盟尺度(7件法)[設問6]
8	フェイスシート

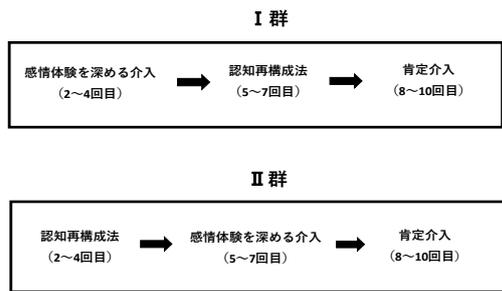


図 1 群ごとによる実験手続き

実験参加者 実験参加者は、I群が 6 名、内訳は女性 6 名で、平均年齢は 23 歳 ($SD: 1.10$) であった。また II 群が 6 名、内訳は男性 1 名女性 5 名で、平均年齢は 23.8 歳 ($SD: 4.07$) であった。

実験期間 2017 年 9 月～2018 年 12 月であった。

3. 結果と考察

本研究では群に分け分析を行ったところ、群によって結果が異なることが明らかになった。

I 群の結果を示す。独立変数を介入条件、従属変数を各尺度得点とする Friedman 検定を行った結果、SPACE：心理症状尺度の下位尺度である「全般性不安」、対人関係問題尺度の下位尺度である「自己主張ができない」、「周りに合わせすぎる」、自己への思いやり尺度である「過剰なとらわれ」では、肯定介入を行った後の方が他 2 条件を行った後よりも得点が有意に低下していた。また KJ 法の結果、感情体験を深める介入を行うことで自身に対しての深い認識やセラピストに対する信頼感が形成されることが示唆された。次に認知再構成法を行うことで、これまでの理解や認識を可視化し明確にすることが可能になることが明らかになった。そして最後に肯定介入を行うことで、自らの考えに対して自信を抱き、話していた内容の認識が変容したことを実感することが出来たということが明らかになった。これらのことから、I 群の順序で行うことは多角的な視点で考えることが出来ることが示唆された。またカウンセリングではネガティブなことに直面する為に、抑うつが上がることもあったが、最後の肯定介入によって自信が持てたことや、情緒が安定したことが明らかになった。これらのことから全般性不安得点の低下に加え、自己への思いやり得点が上がったのだと考えられた。

次に II 群の結果を示す。独立変数を介入条件、従属変数を各尺度得点とする Friedman 検定を行った結果、対人関係問題尺度の下位尺度である「冷淡でよそよそしい」、「自己犠牲的」が、肯定介入を行った後の方が他 2 条件を行った後よりも有意に高いことが明らかになった。また KJ 法の結果、認知再構成法を行い様々な情報を可視化することによって、客観的視点を持つことができ、考え方の変化を認識するようになったことが明らかになった。次に感情体験を深める介入によって新たな発見を得られた事が明らかになったが、自身の感情と向き合うことの困難さを感じたことが明らかになった。さらに最後の肯定介入では沈黙が強く意識された為に、カウンセリングに対して困難を感じる事が明らかになった。これらのことから、II 群の順序で行うことは、最初に認知再構成法によって客観的視点を得ることにより、次に行われた感情体験を深める介入の中で得られた発見が自身の中で明確になるのだと考えられる。しかし認知再構成法におけるワークシートを使った明確化とは異なり、自身の感情と深く向き合うことの難しさや、向き合うことに対する抵抗を感じていたことが明らかになった。そして最後の肯定介入では、ネガティブ感が止まり肯定的な考え方が得られたものの、介入に対する物足りなさや沈黙に対してネガティブなイメージを抱いたことが明らかになった。このことより II 群では、カウンセリングの効果が生じづらい傾向が見られるのだと考えられた。

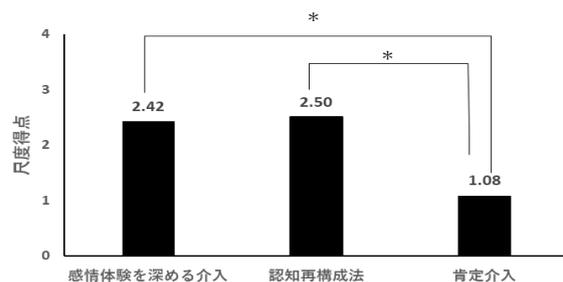


図 2. I 群 SPACE：心理症状尺度「全般性不安」得点
注 1) *, $p < 0.05$

主要参考文献

[1]高野慶輔・坂本真士・丹野義彦(2012). 機能的・非機能的自己注目と自己受容,自己開示. パーソナリティ研究, 21(1), 12-22.

代表的パーソナリティ障害の特徴にみられるオーバーラップと独自性の背景

要因の検討～愛着スタイルの観点から～

The background factors of overlap and originality of typical personality disorder

~From the point of view of attachment style~

山口 千晴

Chiharu Yamaguchi

大妻女子大学大学院 人間文化研究科 臨床心理学専攻

キーワード：パーソナリティ障害，愛着スタイル，自己表象，対象表象

Key words : Personality disorder, Attachment style, Self-representation, Other-representation

1. 目的

パーソナリティ障害（以下PD）はありふれた精神障害であり，その有病率は一般人口において平均11%に上るとされている。しかし従来のカテゴリカル方式に基づくPDの概念においては，複数の異なるPDの併存が頻繁にみられることや，同じPDと診断される人々の間の相違が著しいなどの問題により概念自体の妥当性に疑問が呈されてきた（井上，2016）。そこでDSM-5では上記のような問題点に対応するものとして，パーソナリティ機能（構成要素：自己，対人関係）の障害および病的パーソナリティ特性によって特徴づけられる，PDの代替モデルがその第III部に示された。この代替DSM-5モデルによって，従来のカテゴリカル方式では拾い上げられなかった臨床的に重要なパーソナリティの特徴を周到に把握できる意義は大きいとされている。では，これらの臨床的に重要なパーソナリティの特徴はどのようにして形成されていくのだろうか。

金政ら（2003）によると，Bowlby（1973/2000）は早期（乳幼児・幼児期）における愛着関係が発達過程にある子どもの様々なパーソナリティや社会的能力に多大な影響を及ぼすと述べている。市川ら（2016）の研究では，成人愛着スタイル尺度の下位因子である見捨てられ不安と親密性の回避が複数のPDと関連していることが明らかになった。さらに山口（2017）の卒業論文においては複数の不安定な成人愛着スタイルが境界性・回避性PD傾向に影響を及ぼしていることが明ら

かになった。

Masterson（2000/2007）はPDの診断のための発達の・自己・対象関係のアプローチを提唱した。このアプローチにおいてはPDごとに固有の自己表象と対象表象，およびすべてのPDに共通した見捨てられ抑うつという感情が示されている。そしてこの自己表象と対象表象はそれぞれ，代替DSM-5モデルに示されているパーソナリティ機能の構成要素である，自己と対人関係との関連があると捉えられるだろう。

佐々木ら（2003）によると，愛着対象の表象モデルについては既に1969年よりBowlbyが「内的ワーキングモデル（Internal Working Model：IWM）」と呼び，IWMは生涯にわたって個人の他者や世界との関わり方に影響を及ぼすと述べている。とともに，自己についてのIWMと愛着対象についてのIWMは補完的に構築されることをBowlbyは指摘しているとも述べている。

以上のことより，①代表的PDの特徴にみられるオーバーラップの背景要因として，「見捨てられる」ことにまつわる感情の存在を探索すること，②独自性の背景要因として，愛着表象の測定法であるAdult Attachment Interview（AAI）を参考に自己と他者に対する内的ワーキングモデル，すなわち自己表象と対象表象を確認することを目的とした。

2. 方法

研究1：研究実施責任者および研究協力者の有するSNSアカウント，および直接の依頼によってWeb上の質問紙回答を募った。回答時間は20分程

度であった。質問紙の構成は以下の通りである。

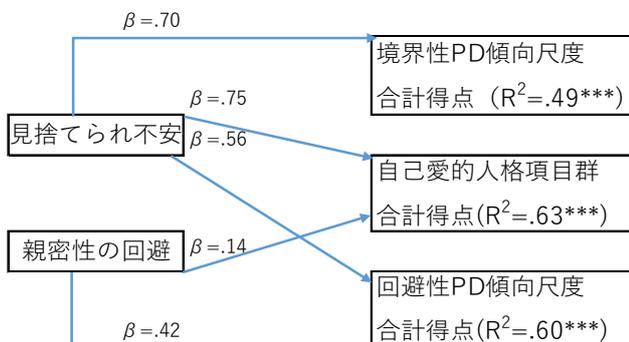
表1 質問紙の構成

設問1	相談歴の有無
設問2	一般他者版成人愛着スタイル尺度 (中尾・加藤, 2004b)(7件法)
設問3	境界性パーソナリティ障害傾向尺度 (市川・望月, 2013) (5件法)
設問4	自己愛的人格項目群 (相澤, 2002) のうち、対人過敏因子、権威的操作因子、自己愛的憤怒因子の22項目 (5件法)
設問5	回避性パーソナリティ障害傾向尺度 (市川・望月, 2013) (5件法)
設問6	フェイスシート (年齢・性別)

研究2：研究実施責任者および研究協力者の有する SNS アカウントにて、専門機関への通院歴または相談歴があり、PD を指摘されたことがある、または自分自身で該当すると考えているインタビュー協力者を募り、AAI を参考にした半構造化インタビューを1時間程度行った。

3. 結果と考察

研究1：一般他者版成人愛着スタイル尺度を独立変数、境界性・自己愛性・回避性 PD 傾向尺度を従属変数とした重回帰分析を行った。その結果、見捨てられ不安は3つ全ての PD 傾向尺度合計得点に正の影響を及ぼしていること、親密性の回避は自己愛性・回避性 PD 傾向尺度合計得点に正の影響を及ぼしていることが明らかになった (図1)



注1) ***...0.1%水準で有意

図1 見捨てられ不安と親密性の回避が及ぼす影響

研究2：各 PD 間で共通する感情および養育者との関わりの主要なエピソードが語られたとともに、特定の PD に固有の自己表象、対象表象、および養育者との関わりの主要なエピソードがそれぞれ語られた (図2)。さらに、インタビュー協力者らは共通して養育者との間で築くことができなかった情緒的繋がりや理解されることを求めており、カウンセラーや重要な他者との関わりを通じて生じた考え方や行動の変化、カウンセリングを中断するに至った不満をも語った。

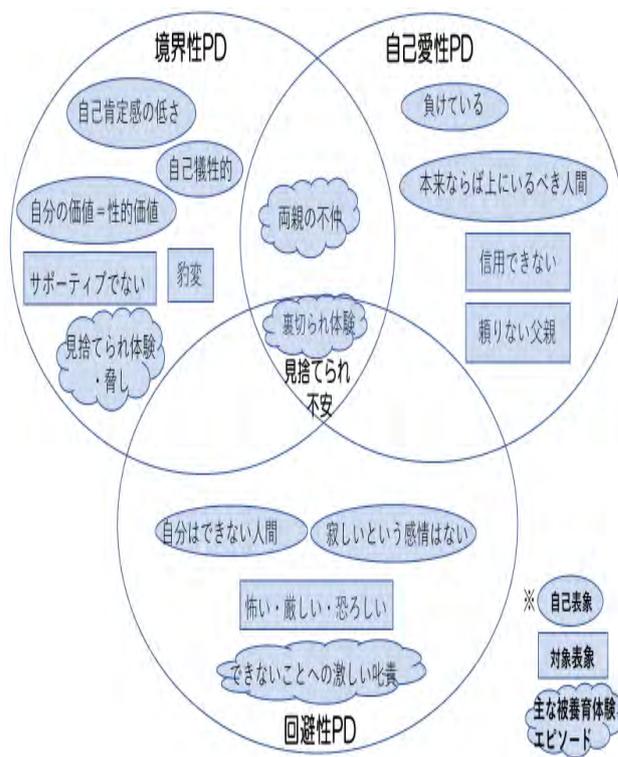


図2 各PDごとの表象とエピソード

4. まとめと今後の課題

本研究では境界性・自己愛性・回避性 PD のオーバーラップの背景要因として見捨てられ不安という感情が、独自性の背景要因としてそれぞれの自己表象と対象表象が示された。少数事例のため一般化することは妥当ではないといえるが、行動レベルに留まらず、より内的な側面からクライエントの体験や社会生活における困難を理解する一助となりうるだろう。

今後の PD 研究においては、養育者との関わりで形成された不安定な愛着スタイルがカウンセリングを通してどのように修復されていくのかを明らかにしていく必要があると考察された。

主要参考文献

[1] American Psychiatric Association. (2013). *Diagnostic and statistical manual of mental disorders* (5th ed.). Washington, DC: American Psychiatric Publishing. (アメリカ精神医学会 高橋三郎・大野 裕 (監訳) (2014).DSM-5 精神疾患の診断・統計マニュアル 医学書院)

[2] James F. Masterson(2000), *The Personality Disorders*. Phoenix Arjona :Zeig, tucher & Co.INC. (佐藤美奈子・成田善弘 (監訳) (2007). パーソナリティ障害 星和書店)